

宮城県仙台市

都山遺跡・仙台平野の遺跡群

— 都山遺跡・仙台平野の遺跡群 —
平成12年度発掘調査概報



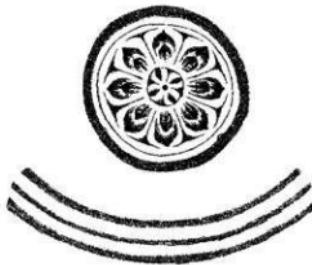
2001. 3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

郡山遺跡 21

—— 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群
平成12年度発掘調査概報 ——

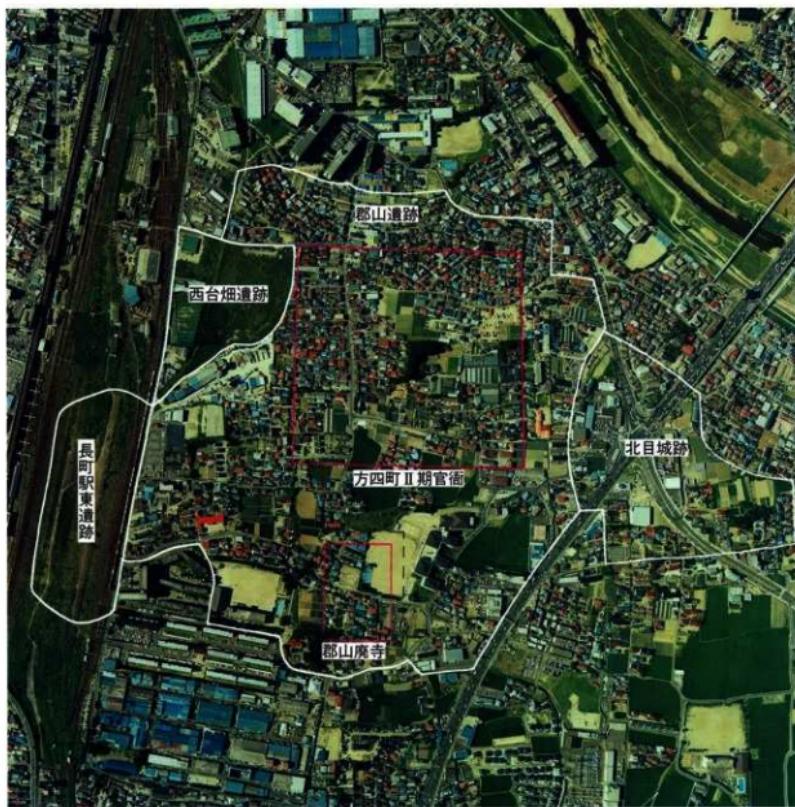


2001. 3

仙台市教育委員会



郡山遺跡とその周辺



郡山遺跡航空写真

序 文

郡山遺跡の発掘調査も今年から第5次5カ年計画に入り、早くも21年が経過しております。これまで数々の成果を積み上げ、東北の古代史解明に一石を投じてまいりました。

幻の城柵として一端を現した昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として、私たちの前に明らかになってきました。辺境とされてきた当地方の歴史観を一変した最古の地方官衙・郡山遺跡の発見は日本の考古学・古代史学界に大きな影響を巻き起こしたものと確信しております。

本年度は昨年度に引き続き、郡山廃寺の範囲を明らかにすることや、方四町Ⅱ期官衙中枢部の構造解明のための発掘調査を実施し、本書はここにその調査の記録を報告、公開するものです。また、市街化への動きが著しい仙台市域にあって、小規模な開発に対応して実施された「仙台平野の遺跡群」についても合わせて報告いたします。

先人の残した貴重な文化遺産を次の世代に継承していくことは、行政によってのみ成し得るものではなく、市民一人一人の深い理解がなくしては成し得ないものであります。それらを目指した継続的な発掘調査を実施できることは、ひとえに土地所有者の方々、地元町内会の皆様の多くのご協力と御支援の賜であり、ここに感謝申し上げる次第です。

これからも文化財保護への深いご理解と御協力をお願いするとともに、本書が文化財愛護精神の高揚の一助となりますことを願ってやみません。

平成13年3月

仙台市教育委員会

教育長 小松弥生

例　　言

1. 本書は郡山遺跡の平成12度範囲確認調査の概報である。

2. 本調査は国庫補助事業である。

3. 本概報は調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 長島榮・I 1、2、3(1)、(2) A、4、6、8、II 1、5

松本知彦 I 3(2) B、(3)、5、7、8

結城慎一 II 2、4

吉岡恭平 II 3

遺構トレース 菅井百合子、岡まり子

遺物実測 伊勢多賀子、大友広美、大友清美、鈴木由美、黒田照子、小村田紀子、石垣美佐江、三浦千賀子、小林広和

遺物トレース 菅井、岡、鈴木、伊勢、大友、黒田、小村田、石垣、三浦

遺構写真撮影 郡山遺跡：長島、松本 仙台平野の遺跡群：結城、吉岡

遺物写真撮影 長島、松本

遺物補修復元 赤井沢千代子、黒田、三浦、小林

図版作成 長島、松本、菅井、吉田りつ子、岡

写真図版作成 長島、吉岡

編集は長島、松本、吉岡がこれにあたった。

4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo 1原点 ($X = 0$ 、 $Y = 0$) とし、高さは標高値で記した。

5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。

6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

S A 柱列などの場跡 S E 戸戸跡 S X その他の遺構

S B 建物跡 S I 竪穴住居跡・竪穴遺構 P ピット・小柱穴

S D 溝　　跡 S K 土坑

7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 繩文土器 F 丸瓦・軒丸瓦 K 石製品

B 弥生土器 G 平瓦・軒平瓦 L 木製品

C 土師器（ロクロ不使用） H 瓦 尾 N 金製品

D 土師器（ロクロ使用） I 陶 器 P 土製品

E 須恵器 J 磁 器

8. 建物跡模式図中の記号は以下の基準により図示した。

●=柱痕跡の検出されたもの

○=掘り方のみ検出されたもの

◎=他遺構との重複により検出されないもの

9. 遺物実測図の網スクリーン張り込みは黒色処理を示している。

10. 本概報の土色については「新版標準上色帳」（古山・佐藤：1970）を使用した。

11. 本概報中の掘立柱建物跡の記載の中で「柱痕跡は21cmの円形で…」とあるものは、柱痕跡の直径が21cmの意である。

目 次

序 文 例 言

I 郡山遺跡

1.はじめ	1
2.調査計画と実績	2
3.第132次・第133次発掘調査	
(1) 調査経過	4
(2) 発見遺構・出土遺物	5
A 第132次調査 B 第133次調査	
(3) まとめ	15
4.第134次発掘調査	
(1) 調査経過	21
(2) 発見遺構・出土遺物	21
(3) まとめ	31
5.第135次発掘調査	
(1) 調査経過	38
(2) 発見遺構・出土遺物	38
(3) まとめ	46
6.第136次発掘調査	
(1) 調査経過	53
(2) 発見遺構・出土遺物	54
(3) まとめ	54
7.第137次発掘調査	
(1) 調査経過	56
(2) 発見遺構・出土遺物	56
(3) まとめ	57
8.総括	
調査成果の普及と関連活動	64
郡山遺跡SB1930建物跡出土のテフラ分析 古環境研究所	67
II 仙台平野の遺跡群	
1.調査計画と実績	70
2.五本松窯跡	72
3.柳生台畠遺跡	74
4.与兵衛沼窯跡	76
5.郡山遺跡	78

I 郡山遺跡

1. はじめに

平成12年度は郡山遺跡範囲確認調査第5次5ヵ年の1年次にあたり、下記の体制で臨んだ。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課

文化財課 課長 大越裕光

管理係 係長 高橋 泰

主事 坂本和男

主事 藤井明美

調査第一係 係長 田中則和

主任 木村浩二

主任 長島榮一

文化財教諭 松本知彦

文化財教諭 伊東真文

調査第二係 係長 結城慎一

主任 吉岡恭平

文化財教諭 根本光一

文化財教諭 加藤徳明

発掘調査、整理を適正に実施するため調査指導委員会を設置し、委員を委嘱した。

委員長 佐藤 巧（東北大大学工学部名誉教授 建築史）

副委員長 田藤雅樹（福島大学行政社会学部教授 考古学）

岡田茂弘（東北歴史博物館館長 考古学）

桑原滋郎（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）

白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所長 考古学）

須藤 隆（東北大大学文学部教授 考古学）

今泉隆雄（東北大大学文学部教授 古代史）

発掘調査および遺物整理にあたり、次の方々から御協力をいただいた。

地権者 佐藤文雄、鈴木三郎、高橋武、高橋利幸

調査参加者 赤井沢サダ子、赤井沢千代子、石垣美佐江、伊勢多賀子、伊勢みづ、伊藤貞子、大友節子、大友広美、大友浩美、岡まり子、尾形陽子、黒田照子、小林広和、小村田紀子、小鶴登喜子、小池房子、佐々木直子、庄司絵美子、菅井百合子、鈴木由美、曾根剣、高橋ヨシ子、中野渡純、牧かね子、三浦千賀子、森隆宏、吉田りつ子、渡辺絵美

さらに下記の諸機関の方々から適切な御教示をいただいた。

奈良国立文化財研究所 山中敏史、三重大大学人文学部教授 山中 章、奈良県立橿原考古学研究所 林部 均

2. 調査計画と実績

平成12年度の発掘調査は、郡山遺跡発掘調査の第5次5ヵ年計画における第1年次目である。第5次5ヵ年計画では、以下の5点について目標を達成するための発掘調査、ならびに整理作業をするものである。

(1) II期官衙中枢部の構造の解明

構造と各建物跡の機能と変遷について未だ再検討の余地が多く、第5次5ヵ年計画において解決しなければならない最優先の課題である。住宅地となっているため調査区の設定が難しいが、小規模な調査を実施しながら構造と変遷を明確にしていく必要がある。

(2) 郡山廃寺の内部構造の解明

郡山廃寺については今までII期官衙を重点的に調査してきたこともあり、調査が不十分である。寺院跡の範囲が平成11年度の調査では明らかになったことから、内部構造の解明に移行していきたい。塔礎石の存在が伝承されていることもあり、主要伽藍が残存している可能性がある。

(3) I期官衙の構造と変遷の解明

経つかのブロックが連結して構成されていることが判明しているが、個々の機能については不明である。北半を中心に範囲、形態、規模などを確認する必要がある。

(4) 南方官衙の範囲と性格の解明東地区では南北2間、東西10間の長大な建物跡が、西地区では四面廻付建物跡が検出されている。それらの性格光明には周辺での発掘調査を実施する必要がある。

(5) 郡山遺跡調査成果概要書

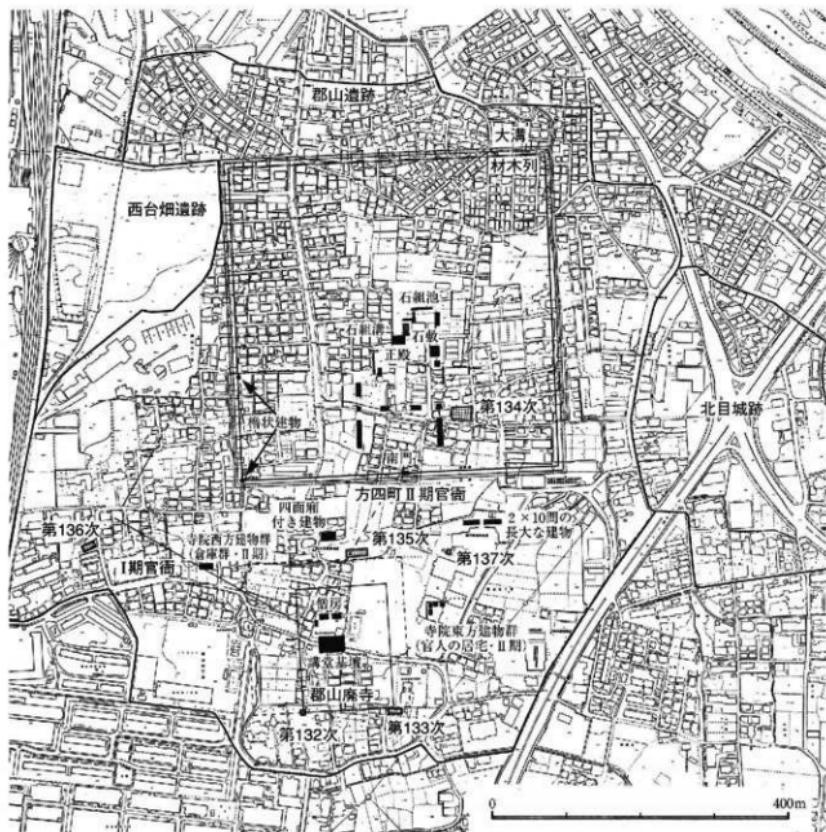
郡山遺跡の官衙と変遷及び出土遺物の纏年等について、第5次5ヵ年計画調査後半期にまとめたい。

これらは平成11年度郡山遺跡調査指導委員会で審議し、了承されたものである。これにより今年度は、方四町II期官衙の中枢部の外周部分で空閑地となっていると考えられる箇所と、昨年度検出した郡山廃寺の南門から推定される廃寺の南西コーナー、南東コーナーを調査の対象とした。今年度は国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」として発掘調査を実施し、発掘調査費は次のような内訳（総経費2,500万円、国庫補助金額1,250万円）をうけた。またこれまで仙台市内に分布する重要遺跡の調査や、それらにおける個人住宅などの小規模開発に伴う発掘調査は、「仙台平野の遺跡群」として予算を按分して実施してきた。今回も「仙台平野の遺跡群」に該当する発掘調査が必要となれば同様に対応することとし、郡山遺跡発掘調査に2,000万円、仙台平野の遺跡群に500万円という予算配分をした。したがって郡山遺跡発掘調査については以下の実施計画を立案した。

表1 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査予定期間	調査原因
第132次	郡山廃寺南西部	12m ²	範囲確認調査
第133次	郡山廃寺南東部	180m ²	範囲確認調査
第134次	方四町II期官衙南東部	390m ²	範囲確認調査
第135次	I期官衙東辺	318m ²	範囲確認調査

なお計画立案後に個人住宅の建替えに伴った発掘調査の実施が必要になったため第136次調査を、また郡山中学校内の屋外トイレ建設予定地で第137次調査を「仙台平野の遺跡群」の対象として実施した。これら第132次～第137次調査までを「I 郡山遺跡」の中で報告する。なお「仙台平野の遺跡群」に該当する発掘調査は、郡山遺跡を含む4遺跡5地点で実施したが、いずれの調査箇所も小規模で、遺構、遺物の希薄な地点が多かったため、調査成果は本書「II 仙台平野の遺跡群」に掲載することとした。よって「仙台平野の遺跡群」としての報告は刊行し



第1図 郡山遺跡全体図

ないこととした。なお郡山遺跡の第136次、第137次調査の報告については、「1 郡山遺跡」で詳細に報告している。

表2 発掘調査実績表

調査次数	調査地区	調査予定面積	調査期間	備考
第132次	郡山廃寺南西部	12nf	6月12日～6月26日	郡山遺跡発掘調査
第133次	郡山廃寺南東部	180nf	5月22日～7月13日	*
第134次	方四町Ⅱ期官街南東部	390nf	8月22日～12月18日	*
第135次	1期官街東辺	218nf	7月13日～11月10日	*
第136次	遺跡南西部	30nf	9月18日～9月28日	仙台平野の追跡群
第137次	南方官街東地区	20nf	10月30日～11月16日	*

3. 第132次・133次発掘調査

(1) 調査経過

第132次、第133次調査は、万四町Ⅱ期官街南方に位置する郡山廃寺の南西ならびに南東コーナーを確認し、寺院の範囲を明らかにするための調査である。郡山廃寺の範囲については、平成10年度の第119次、第120次発掘調査によって寺院の外側を巡る小規模な材木列を検出し、これまで想定していた北辺と東辺の再確認を行なった。また昨年度の第128次発掘調査では、寺院の南門となるSB1880門跡やそれに取り付き寺院の南辺を区画するSA1850材木列も発見された。これにより郡山廃寺の範囲は東西120~125m、南北167mであると考えられるにいたった。

第132次調査区は昨年度の第128次調査A区から西に40mの地点である。この地点の北60mでは、昭和62年度の第70次調査で寺院西辺となるSA1066材木列が発見されている。よって西辺のSA1066材木列と南辺のSA1850材木列の交差する箇所に4m×3mの調査区を設定して、平成12年6月12日より発掘調査を実施した。現況は宅地内の駐車場になっているが、以前は家屋が建っていたところである。調査区内は擾乱により遺存状況は良好ではなかったが、寺院の区画となるSA1850材木列が調査区内を横断し、さらに西に延びていることが明らかとなった。調査は材木列の確認に留め、平成12年6月20日まで調査を行ない、6月26日に埋め戻し、整地作業を行なった。

第133次調査区は、第128次調査A区から東へ65mの地点である。この地点は昨年度の寺院東辺を対象とした第126次調査C区の南隣接地である。東辺と考えられたSA1785と南辺のSA1850が交差すると考えられる畠地に、9m×20mの調査区を設定して、平成12年5月22日より発掘調査を実施した。調査区内の西側には耕作による擾乱が著しい箇所があるが、寺院の区画となるSA1850材木列が調査区内を横断し、さらに東に延びていることが明らかとなった。北から延びている東辺と考えられたSA1785材木列とはL字にコーナーを形成する様相にはならなかつた。平成12年7月13日まで発掘調査を行ない、埋め戻しならびに整地作業を終了したのは平成12年7月25日である。



第2図 第132次・133次調査区位置図

(2) 発見遺構・出土遺物

A 第132次調査

今回の調査で発見された遺構は、材木列1列、土坑2基、溝跡1条、ピットなどである。擾乱が著しい箇所があるが、基本層位第Ⅲ層上面で遺構は検出されている。SK1931土坑とSD1941溝跡は遺構の検出に留めた。

SA1850材木列 調査区の北端から横断するようにE-2°-S方向に延びる材木列を検出した。掘り方の上幅は23~35cm、深さは60cm程である。掘り方のほぼ中央、広いところでは南壁より直径10~12cmの柱痕跡が見られる。掘り方の断面形は柱痕跡の箇所のみが深くなっていた。遺物は土師器甕の小破片が1点出土したのみである。

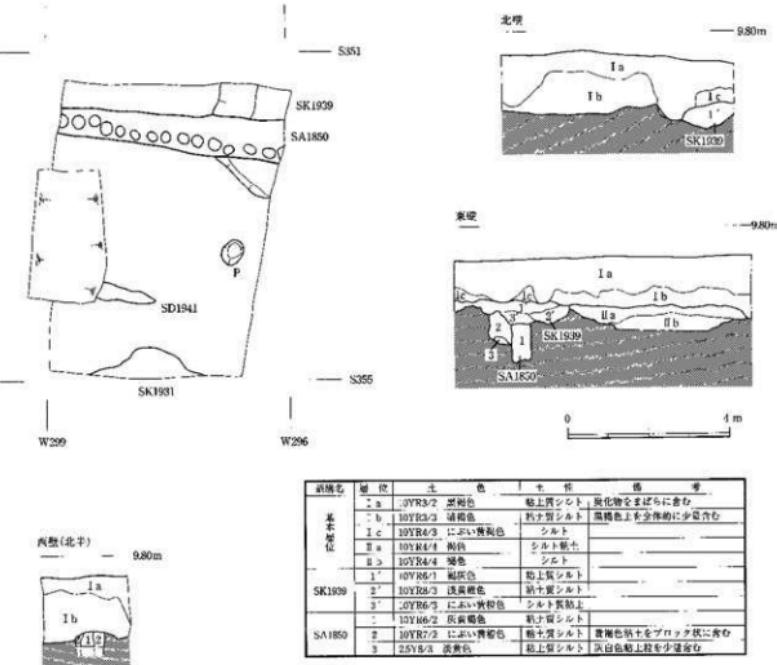
SK1939土坑に切られている。

SK1939土坑 東西0.6m以上、南北0.95m以上の土坑で、深さは30cm程である。壁は上方では直線的に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。遺物は出土しなかった。

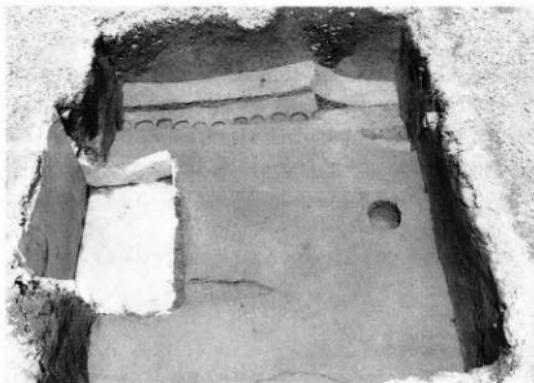
SA1850材木列を切っている。

SA1931土坑 東西1.0m以上、南北0.25m以上の土坑である。

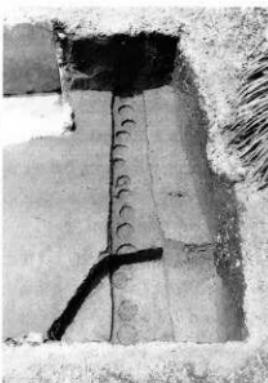
SD1941溝跡 上幅10~15cmの溝跡と推定される。方向はE-5°-Sで、検出した総長は0.5mである。検出した上面には炭化物と焼土が見られた。



第3図 第132次調査区平・断面図 (1/60)



1 第132次調査区全景（南より）



2 SA1850材木列（東より）

B 第133次調査

今回の調査で発見された遺構は、材木列2列、竪穴住居跡3棟、溝跡2条、土坑5基、井戸跡1基、ピットなどである。調査区内の西側には耕作による擾乱が著しい箇所があるが、遺構は基本層位IV層上面で検出した。

SA1785材木列 調査区の中央北側の拡張部分で0.9mのみ検出した。擾乱により遺存状況は良好ではなかった。方向はN - 6° - Eである。掘り方の上幅は20~40cm程度、そのほぼ中央に直径10~25cmの円形の柱痕跡がある。昨年度の第126次調査の延長線上での検出である。

遺物は出土しなかった。

SA1850材木列 調査区を東西に横断するように20mに渡って検出された。方向はE - 0° - S（真東西）である。掘り方の上幅は30~50cm程度であるが、一部70~90cm程度の部分もある。下幅は20~30cm程度、深さは残存状況良好な場所で30cm程度である。そのほぼ中央に直径10~25cmの円形の柱痕跡がある。調査区の西壁、ならびに東壁の確認されていることから、さらに東西に伸びていくことが明らかである。底面まで掘り下げた箇所では、柱痕跡の底部で直徑18cmほどの河原石と考えられる石が検出されたことから、根石として埋設されその上に柱が据えられていた可能性がある。埋土はにぶい黄褐色シルト質粘土である。

遺物は、平瓦G-105（第10図1）、土師器壺底部1点、その他に土師器の小破片が多数出土している。

SI1942・1943を切り、SK1932・1937・1938に切られる。

SD1946溝跡 上幅55~60cm、底面幅40~45cm、断面形は舟底形の溝跡である。壁は両側では緩やかに立ち上がるが、北側はやや直立気味に立ち上がる。底面は凹凸がある。方向はE - 1° - Sで、検出した総長は約36mである。

遺物は土師器片が1点出土した。

SI1942・1943を切り、SE1934に切られており、これより東側では検出されなかった。

SD1947溝跡 上幅80~100cm、底面幅40~70cm、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はN - 12° - Sで、検出した総長は約4.7mで調査区北側に伸びている。調査区中央部の擾乱に切られており、これより南側では検出されなかった。

遺物は最下層より土師器片が1点出土した。

SA1850を切り、SK1937に切られる。

SI1942 穫穴住居跡 東西3.3m、南北3.2mの隅丸方形形の竪穴住居跡である。南辺での方向はE - 9° - Sである。遺構の検出のみにとどめている。

遺物は出土していない。

SI1943、SD1946、SA1850に切られる。

SI1943 穫穴住居跡 東西4.3m、南北4.4mの隅丸方形形の竪穴住居跡である。東辺での方向はN - 39° - Eである。遺構は検出のみを留めているが底面が残存している箇所があった。

遺物は埋土中より勾玉K - 245（第7図2）、土師器甕C - 871（第7図1）、ほか土師器小破片などが出土した。

SI1942を切り、SA1850、SD1946、SE1934に切られる。

SI1944 穫穴住居跡 東西3.3m以上、南北1.8m以上の竪穴住居跡である。北辺での方向はE - 43° - Sである。調査区西南隅で遺構の北西角が検出された。遺構は検出のみを留めている。

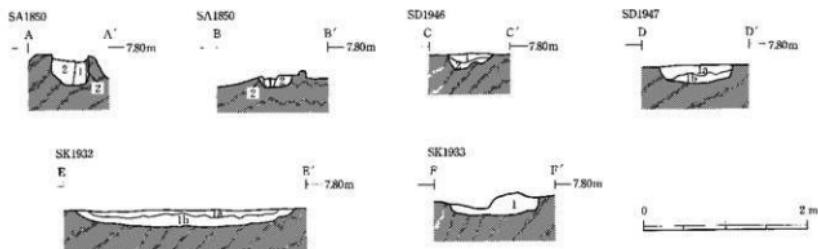
遺物は掘り方理上より土師器甕片、ほか土師器小破片などが出土した。

SK1932 土坑 東西1.9m、南北2.65mの土坑で、深さ20cmである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は1層中より擂石、土師器片、磁器片、陶器片などが出土した。

SA1850を切っている。

SK1933 土坑 東西1.1m、南北1.2mのほぼ円形の土坑で、深さは50cmである。底面はおおむね平坦で壁はやや直立気味に立ち上がる。遺物は出土していない。

SE1934 井戸跡 直径2.4m以上の円形で、深さは220cm以上である。埋土は黒褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色



層	底	土	色	土	性	特	等
SA1850 A - A'							
1	10YR 8/2	黒褐色		粘	土	柱痕跡	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色		シルト質粘土			
SA1850 B - B'							
1	10YR 2/1	黒褐色		粘	土	柱痕跡	
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色		シルト質粘土			
SD1946 C - C'							
1	10YR 3/2	黒褐色		シルト			
2	10YR 5/2	黒褐色		粘土質シルト	質	柱(にぶい黄褐色柱)を含む	
SD1947 D - D'							
1 a	10YR 7/6	明黄褐色		粘土質シルト			
1 b	10YR 7/6	明黄褐色		粘土質シルト	古色粘土をブロック状に含む		
SK1932 F - F'							
1 a	10YR 5/1	褐色		粘	土	灰褐色粘土質シルト、強化粘土を多量に含む	
1 b	10YR 6/1	褐色		粘	土	強化粘土を含む	
SK1933 F' - F''							
1	10YR 4/2	灰褐色		シルト	10YR 6/6	褐色のシルトを含む	

第4図 第133次調査区遺構断面図(1) (1/60)

粘土質シルト、暗褐色粘土などで人为的に埋め戻されたと考えられる。

遺物は軒丸瓦F-91(第7図7)、軒丸瓦F-93(第9図1)、丸瓦F-88(第8図1)、丸瓦F-89(第8図2)、丸瓦F-90(第8図3)、平瓦G-103(第9図3)、平瓦G-104(第9図2)、低石、須恵器蓋、土師器壺、土製品P-51土鍤(第7図3)、土製品P-50紡錘車(第7図6)が、下層より陶器片、曲物L-17(写真図版14)が出土した。

SI1943、SD1946を切っている。

SK1936土坑 調査区北西部で検出された、直径1.05m程のほぼ円形を呈する土坑である。掘鉢上の形状を持ち壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は瓦質土器1-52火鉢(第7図8)、瓦片が出土した。

SK1937土坑 調査区中央部北側で検出された、長軸62cm以上の土坑である。擾乱により、全体の形状は不詳である。

遺物は出土していない。

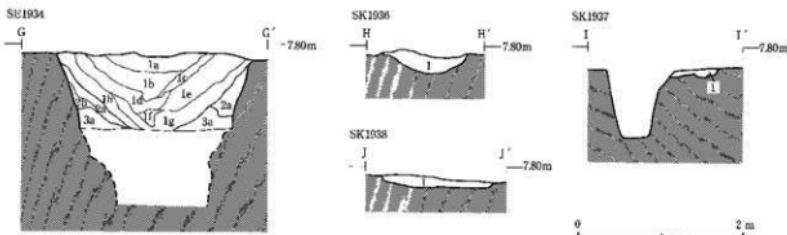
SD1937、SA1850に切られる。

SK1938土坑 惠西1.1~1.4m、南北75~85cmの土坑で、深さは15cm程である。

遺物は出土していない。

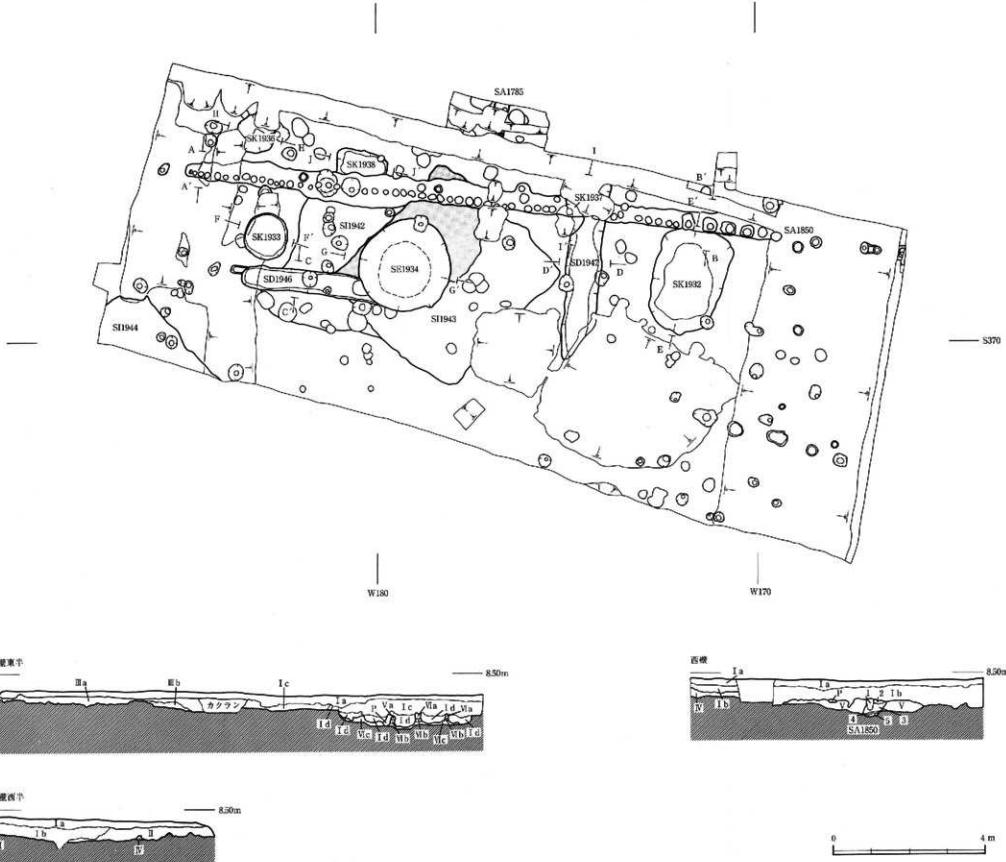
SA1850を切る。

ほかにP20より古銭N-99宣德通宝(第7図5)、P52より土師器台付壺C-872(写真21)、また表土中からではあるが古銭N-98洪武通宝(第7図4)などが出土している。



品 位	ニ	色	チ	性	質	考
SK19H	C-G'					
1 a	10YR4/2	に い ぶ い 黄 鮎 色	シ ル ド質	上	白地、 暗色胡蝶色上を斑調に含む	
1 b	10Y3/2	淡 鮎 色	シ ル ド質	上	白色、 黄鮎色トロブロク状に含む	
1 c	10Y4/2	黄 鮎 色	シ ル ド質	上	白色、 黄鮎色上を斑調に含む	
1 d	10Y2/3	淡 鮎 色	耐	上	白色鮎色を弱めに含む	
1 e	10Y4/3	に い ぶ い 黄 鮎 色	シ ル ド質	上	白色鮎色をブリック状に含む	
1 f	10Y2/2	淡 鮎 色	耐	上		
1 g	10Y6/2	淡 鮎 色	耐	上	白色、 白地、 暗色鮎色を多量に含む	
1 h	10Y5/4	に い ぶ い 黄 鮎 色	シ ル ド質	上	白色鮎色を多量に含む	
2 a	10Y8/6	鮎 色	シ ル ド質	耐		
2 b	10Y8/4	鮎 色	シ ル ド質	上	白色鮎色を弱めに含む	
2 c	10Y2/1	鮎 色	耐	上	白色鮎色を強めに含む	
SK18H	H-N'					
1	10YR4/3	に い ぶ い 紫 鮎 色	耐	上	全地に紫化鮎色多量に含む	
SK18H	I-T'					
1	10Y8/7/4	に い ぶ い 黄 鮎 色	シ ル ド質	上	白地鮎色をブロク状に含む	
SK18H	J-T'					
1	10Y5/2	長 鮎 色	耐	上	鮎色トロブロク状に含む	

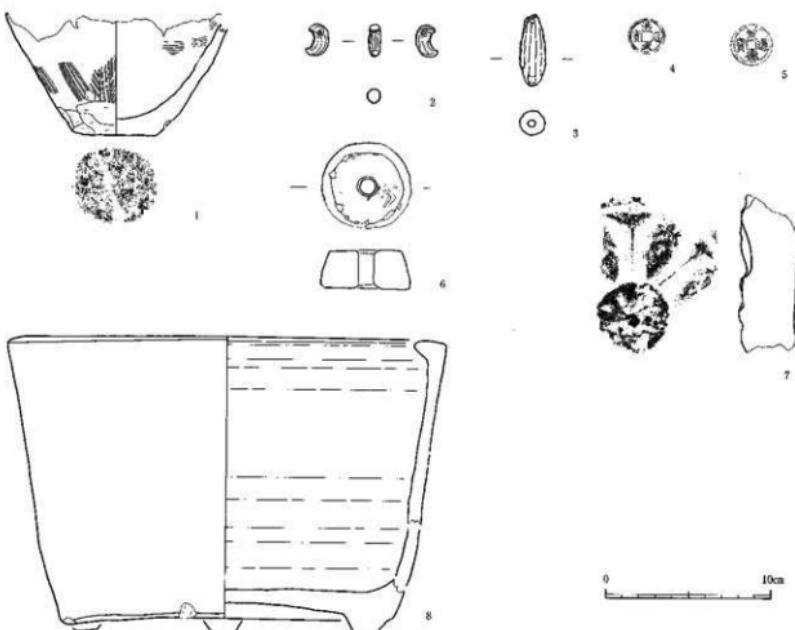
第5図 第133次調査区縦構断面図(2) (1/60)



第6図 第133次調査区平・断面図 (1/100)

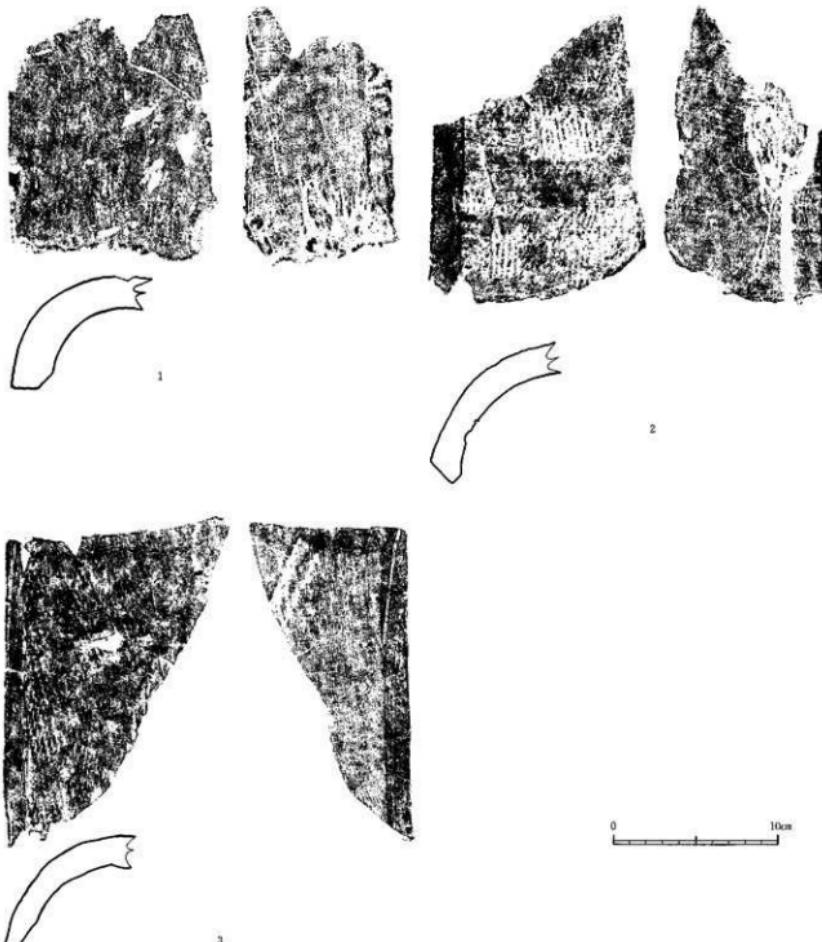
地図名	場所	土色	土種	特徴	
				調査作上	調査作下
木	I-a	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	白苔跡なし	黄褐色帶有シルトを部分的に含む(黒砂)
	I-b	10YR4/2 不透明白色	シルト質粘土	白苔跡なし	
	I-c	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土	白苔跡なし	
	I-d	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト	白苔跡なし	
城	II	10YR5/4 に赤い黄褐色	シルト質粘土	白苔跡なし	黒の旧耕作土
	III-a	10YR3/1 黄褐色	シルト	白苔跡なし	
	III-b	10YR4/1 に赤い黄褐色	粘土	白苔色、腐化鉄を含む	
	IV	10YR2/4 に赤い黄褐色	シルト	白苔跡なし	
位	V	10YR8/4 黄褐色	シルト	白苔跡なし	
	VI-a	10YR6/3 に赤い黄褐色	粘土	白苔跡なし	
	VI-b	10YR5/2 不透明白色	粘土	白苔跡なし	
	VI-c	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土	白苔跡なし	
背景				適合する層(人為堆積)	
P	1	10YR4/1 黄褐色	シルト	適合する層(人為堆積)	
		10YR4/6 塗色	粘土質シルト		
開拓					
SA1850	1	2.5Y5/4 淡黃色	シルト	黒色粘土をブロック状に含む	
	2	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土	白苔跡	
	3	10YR8/1 黄褐色	粘土		
	4	10YR7/6 可塑性褐色	シルト質粘土		
	5	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土		
	6	10YR4/6 塗色	シルト	白色粘土を少量含む	

第3表 第133次調査区土層観察表



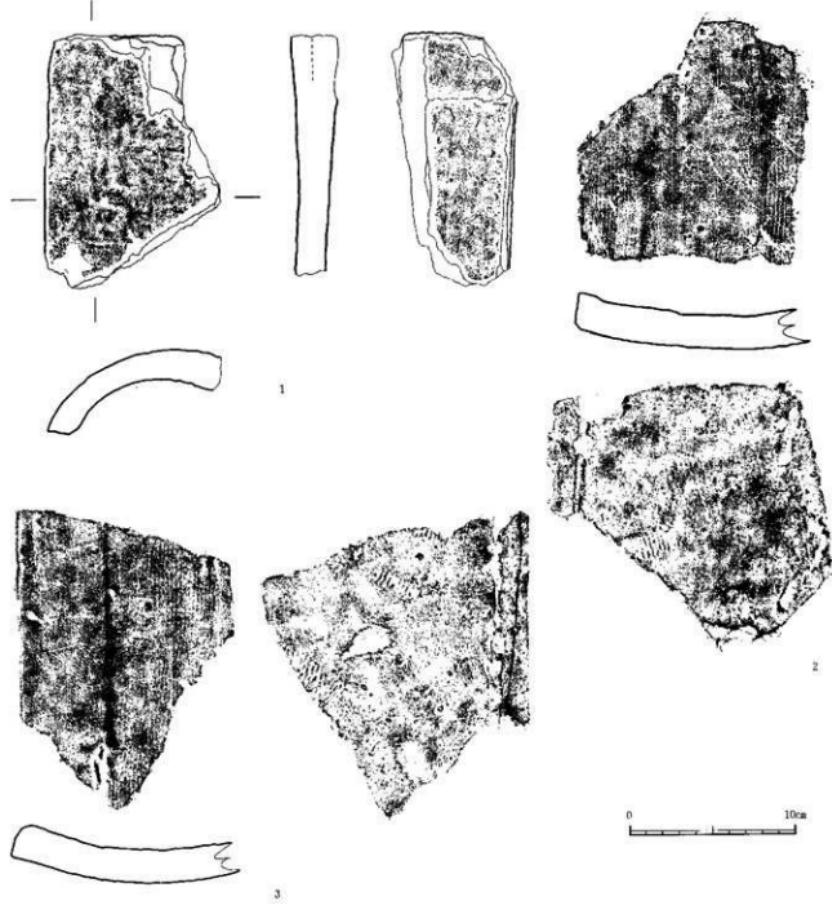
図版 番号	地図 番号	種別	器形	出土位置 所生土層 層位	法 面積 (cm)	外 面 調 査	内 面 調 査	備考	写真 回数
1	C-871	土器部	壺	SH1943	残存高7.6、底径5.3	ハゲメ、ハラケズリ、底部ハラケズリ	ヘラナゲ		19
2	K-245	石製品	勾玉	SH1941	長さ1.9、直径0.8				20
3	P-51	陶製品	土總	SH1934	長さ4.4、幅1.6				22
4	N-98	金銀製品	高麗銅錢	1-1至全部	直径2.2				18
5	N-99	金銀製品	高麗銅錢	P10柱上	直径1.25				17
6	P-30	上級品	渤海半	SH1934	直径3.35、底径2.3	無打孔、腹皮有り			23
7	P-91	瓦	軒瓦	SH1934		手作成平瓦、全面にすり付有り			25
8	I-55	陶器	大鉢	SK1936	器高15、口径26.6、底径20.3	器身クロコ、口沿ナガ、底部内側有凹り、ハラナゲ、深3.2、内面クロコ			24

第7図 第133次調査区出土遺物(1)



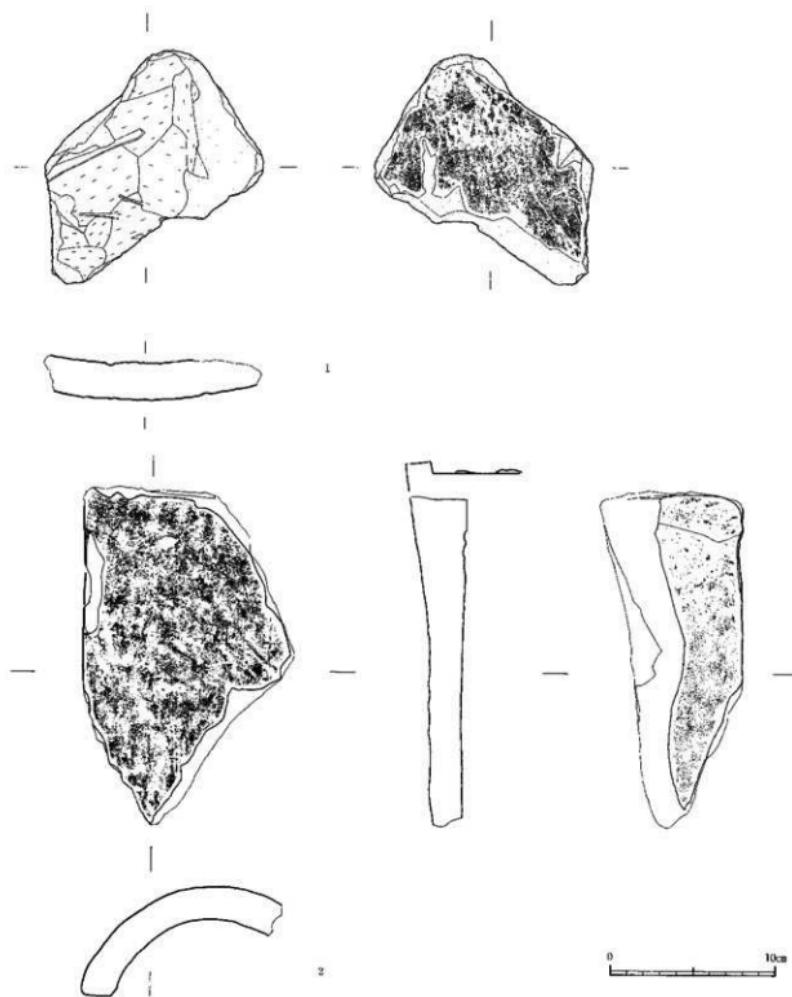
回収 番号	焼締 目	被 覆 物	被 覆 形	出土地點 山土遺跡 地図	凸面		内面 被覆物	備考	分類 例
					外 部 形	内 部 形			
1	上	灰	丸瓦	SE1934	すり削し		布目板・ケズリ	27	
2	F-89	灰	丸瓦	SE1931	圓印きのちすり消し	布目板・ケズリ	!	28	
3	F-90	灰	丸瓦	SE1934	圓印きのちすり消し	布目板・ケズリ		29	

第8図 第133次調査区出土遺物(2)



回収 番号	銅鋳 部分	種 別	番 号	出土地点 出土環境	内 面		回 収 番号	写真 回数
					外 面	内 面		
1	J-93	瓦	SE1934	鍛造場・炉底	鋸切きのちすり出し、のちナガ・窄目模・薄削ナギ		30	
2	G-104	瓦	SE1934	鍛造場の土まで埋し	窄目模・袖型瓦		32	
3	G-103	瓦	SE1904	鍛造場の土まで埋し	窄目模・袖型瓦		31	

第9図 第133次調査区出土遺物(3)

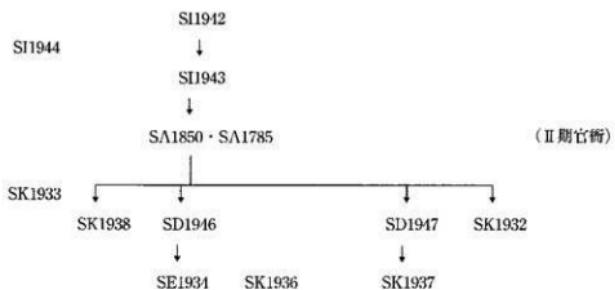


編號 No.	資料 種類	性 質	器 形	出土地點 出土地点	凸 面 外側面	凹 面 内側面	備考 備考
1 G-H2	瓦	半瓦	SA1860 繋り瓦	繋印字のちぎり瓦	各面滑	各面滑 ケズリ	16 回版
2 F-H2	瓦	新丸瓦	カラン		ハラテ・ハラケズリ	瓦面・ハラケズリ ・撻ナメ	33

第10図 第133次調査区出土遺物(4)

(3)まとめ

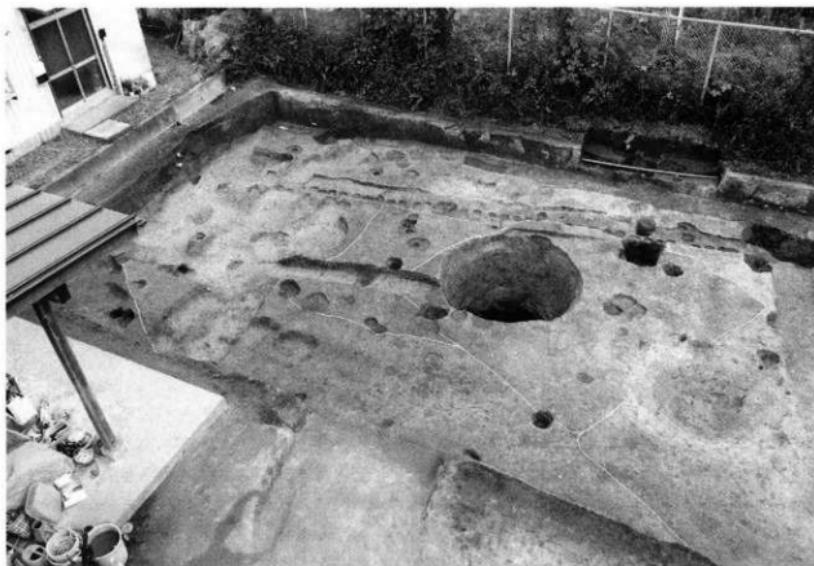
主な遺構の重複関係を整理すれば次のようになるが、並列関係は必ずしも同時性を示すものではない。



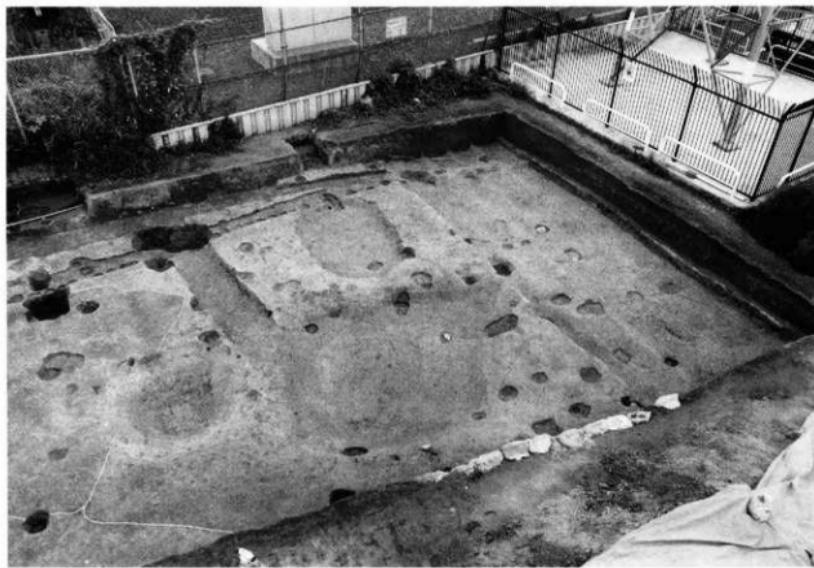
第132次調査では、南辺と考えられるSA1850材木列を推定線上で検出したが、北から延びて接続すると推定していた西迎材木列については検出することができなかった。第133次調査では寺院東辺、南辺と考えられる材木列SA1785、SA1850を推定線上で検出した。しかし、寺院東辺、南辺となる材木列はコーナー付近で逆L次形を示さずに南辺がさらに東へ延び、東辺は南辺と接することなく90~170cmの範囲で空いていたようである。造溝の検出状況からは、東辺南端と南辺間の空いていた正確な距離は不明であるが、この地点では材木列がT字形になり南辺はさらに東方に延びている。南西コーナーについても今回の調査区が狭かったために南辺と西辺との詳細な様相が明らかにできなかったが、南東コーナーと同様な様相であると考えておきたい(註1)。また、第62次調査で検出された北西隅門のような門跡は、第132次調査、第133次調査とも発見されなかった。

以上により寺院の南西、南東コーナ付近では南辺材木列はさらに西、東方向に延びておりT字形を呈さないことが確認された。これにより寺院の外郭が方形に拘まるのではなく、南辺は東西両側とも延長して張り出している可能性が示してきた。今後ともこの周辺での調査を積み重ね、寺院の範囲ならびに寺院中堅部の様相をより明らかにしていきたい。

註1 第132次調査区については、発掘調査の可能な調査区設定の範囲に制約があり、充分な範囲での調査ができなかった。今後とも南西コーナ付近での調査を重ねて実施していく必要がある。



3 第133次調査区全景西半（南より）



4 第133次調査区全景東半（南より）



5 第133次調査区周辺（南より）



6 第133次調査区拡張部



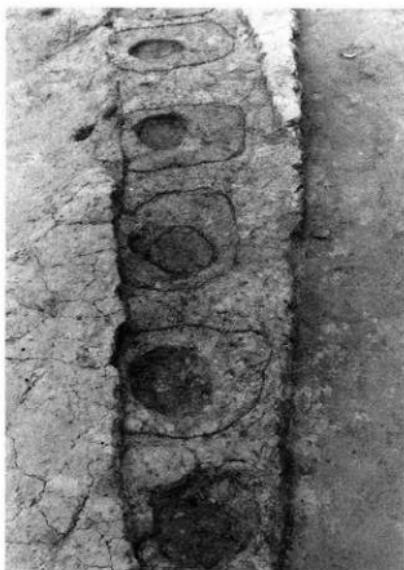
7 SA1785材木列検出状況



8 SA1850材木列検出状況



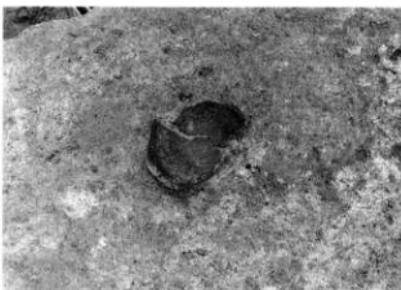
9 SA1850材木列底面



10 SA1850材木列底面検出状況



11 SI 1943遺物出土状況 (K-245)



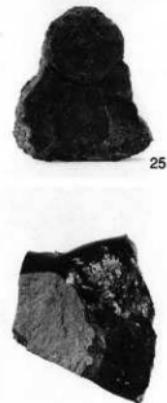
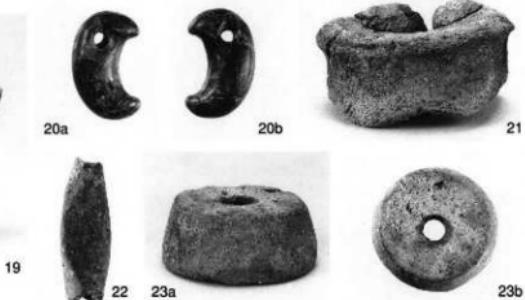
12 SI 1943遺物出土状況 (C-871)



13 SE1934井戸跡検出状況



14 SE1934井戸跡遺物出土状況 (L-17)



- | | | | | | |
|---|--------------------------------|---|--------------------------------------|---|--------------------------------------|
| 15 K-247 磚
16 G-105 平瓦
17 N-99 宣徳通宝 P.20
18 N-98 洪武通宝 裂土 | SA1850
SA1850
P.20
裂土 | 19 C-871 斧
20 K-245 勾玉
21 C-872 台付壺
22 P-51 土鍤 | SI 1943
SI 1943
P.52
SE1934 | 23 P-50 火鉢車
24 I-52 軒丸瓦
25 F-91 不明品
26 K-244 不明品 | SE1934
SK1936
SE1934
SE1934 |
|---|--------------------------------|---|--------------------------------------|---|--------------------------------------|



27a



27b



28a



28b



29a



29b



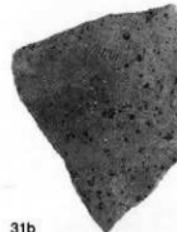
30a



30b



31a



31b



32a



32b



33a



33b



34

27 F-88 丸瓦 SE1934

31 G-103 平瓦 SE1934

28 F-89 丸瓦 SE1934

32 G-104 平瓦 SE1934

29 F-90 丸瓦 SE1934

33 F-92 軒丸瓦 カクラン

30 F-93 丸瓦 SE1934

34 L-17 曲物 SE1934

4 第134次発掘調査

(1) 調査経過

第134次調査は、方四町Ⅱ期官街の中央やや南東寄りに位置し、Ⅱ期官街中枢部を構成する東建物列に接した地点である。中枢部に隣接する外側は、昭和63年度の第77次調査や平成8年度の第110次調査などのように建物列から17~20mは、空閑地となっている。今回の調査地点は東の建物列に接し、その外（東）側がどのような状況となっているかを確認できる箇所である。調査対象地に12m×27mの調査区を設定して、平成12年8月24日より発掘調査を実施した。調査区内は土層観察の結果、現況は畠地となっているが、それ以前は水田でその上面に盛土をして畠地として使用していた。さらにその水田の下層は畠地としての天地返しと呼ばれる土の入れ替え痕跡が残っている。これは元々は畠地であったところが土取りなどにより、土地の標高が低くなり、水田としての土地利用に転換したためであろう。このような土地利用の転換があったために、遺構の上面はかなり削平されていると見られ、現地表から遺構の検出面まで80~110cmと深くなっている。調査地は平成12年12月18日までに埋め戻し、整地作業を行なった。

(2) 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡6条、土坑8基、井戸跡1基、性格不明な遺構1、ピットなどである。遺構は基本層位第Ⅳ層上面で検出されている。第Ⅰ層は現状の畠、第Ⅱ層は水田、第Ⅲ層は畠である。第Ⅲ層までは古代以降の遺物が含まれている。

SB1929掘立柱建物跡 西桁行が4間以上、東桁行が4間あるいは5間以上（総長8.2m以上、柱間寸法200~290



第114図 第134次調査区位置図

cm)、梁行2間（総長6.0m、柱間寸法290~310cm）の南北棟で、南に廂あるいは縁を有する建物跡である。方向は西桁行でN-2°-Wである。柱穴は一辺40~60cmの隅丸方形で、柱痕跡は10~24cmである。また、S3E1、S2W2柱穴に抜き取り穴が伴っている。

遺物は、掘り方埋め土からロクロ使用の土師器片、赤焼き土器片や摩滅した土師器片が少量出土している。

SB1930、SX1983、SK1976、SD1969を切り、SD1962、SK1974に切られている。東桁行の柱穴がSD1959に切られている可能性がある。

SB1930掘立柱建物跡 桁行4間以上（総長8.0m以上、柱間寸法200~340cm）、梁行2間（総長6.9m、柱間寸法310~380cm）の南北棟で、南に廂あるいは縁を有する建物跡である。方向は西桁行でN-3°-Wである。柱穴は一辺70~120cmの方形、隅丸長方形で、柱痕跡は20~28cmである。またすべての柱穴掘り方埋め土の中に、灰白色の火山灰がブロック状に含まれている。またS1E3柱穴に抜き取り穴が伴っている。

遺物は、S1E1柱穴掘り方埋め土から回転糸切り無調整の赤焼き土器D-66坏（第14図1）、両面黒色処理された回転糸切り無調整の土師器D-67坏（第14図7）、赤焼き土器D-68坏片（第14図3）、両面黒色処理されたロクロ使用の土師器D-69坏（第14図4）、赤焼き土器D-70高台皿片（第14図5）、回転糸切りの土師器D-71坏底部片（第14図6）、S1E2柱穴柱痕跡から回転糸切り無調整の赤焼き土器D-61坏（第14図2）が、またこの他に柱穴掘り方埋め土からロクロ使用の土師器片、赤焼き土器片、須恵器壺片などが出土している。

SX1983を切り、SB1925・1935、SD1959・1962に切られている。

SB1935掘立柱建物跡 西桁行が4間以上、東桁行が3間あるいは4間以上（総長8.2m以上、柱間寸法200~340cm）、梁行2間（総長6.0m、柱間寸法300cm）の南北棟の建物跡である。方向は西桁行でN-2°-Wである。柱穴の形態、規模は一定せず、柱痕跡も10~24cmである。柱列となる可能性もある。



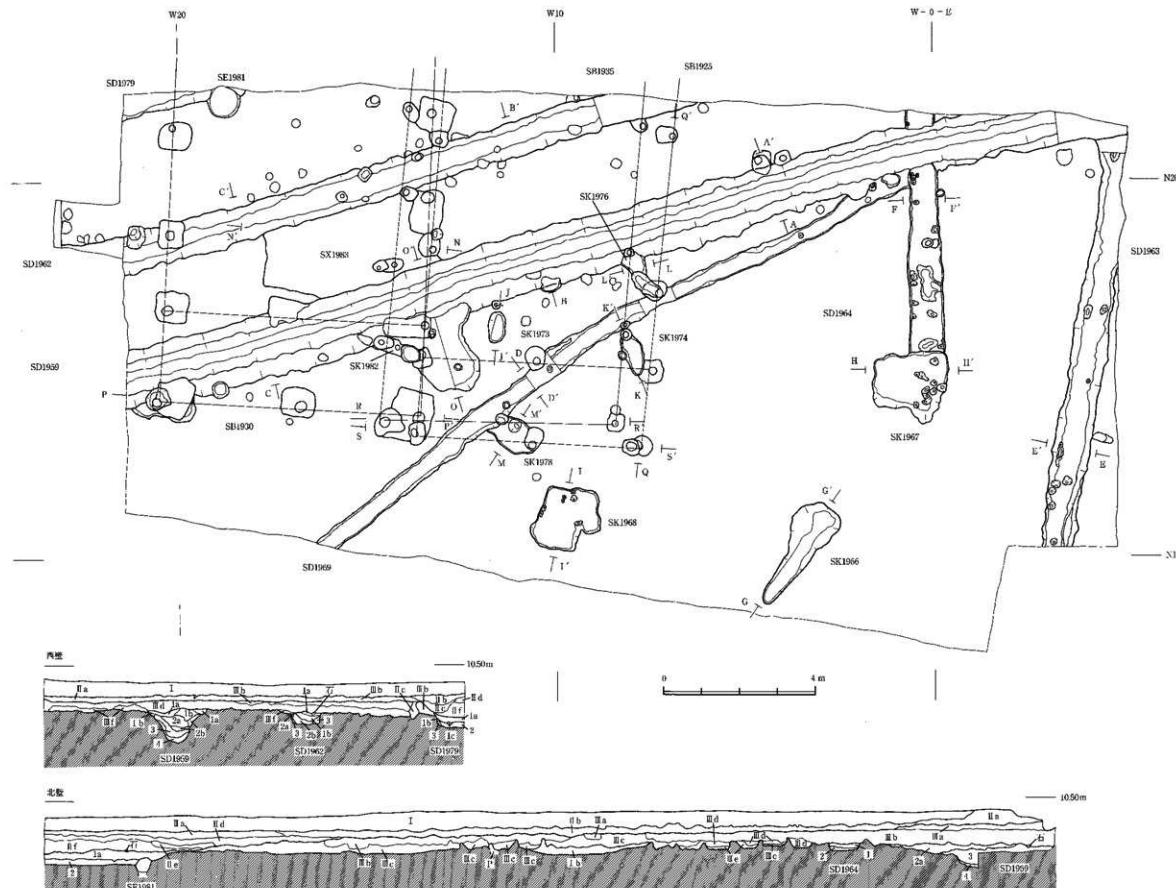
35 SB1930 N1E2柱穴



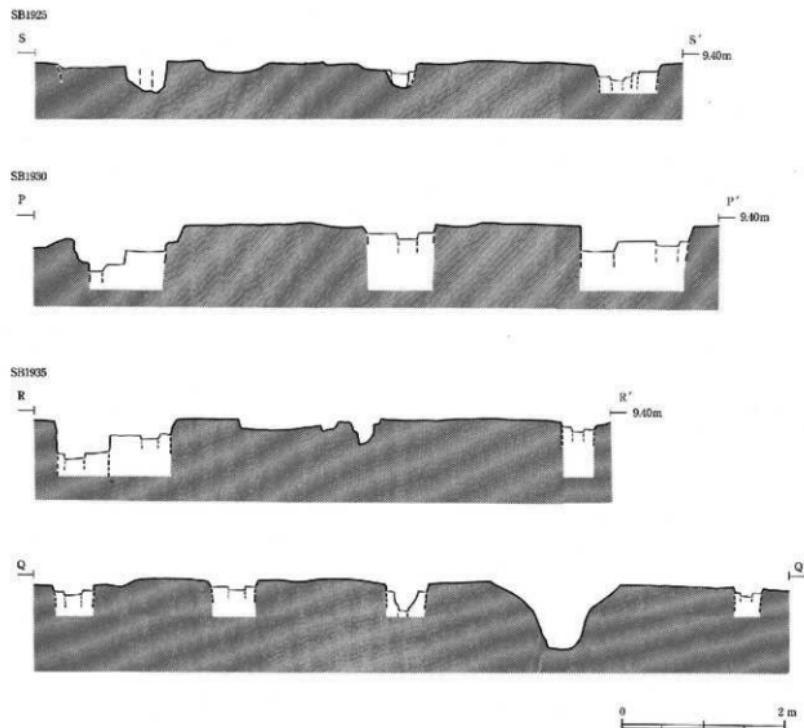
36 SB1930 S2E1柱穴

遺構名	位号	土色	土性	備考	遺構名	位号	土色	土性	備考	
北壁・西壁（板木部位共通）										
基	I-2.57T/6	明黄褐色	砂	現在の相	SD1962	I-a	10YR4/2	灰黃褐色	粘土 黄鉄色粘土をブロック状に含む	
	I-10YR5/1	褐灰褐色	粘土	旧水面		I-b	10YR3/2	褐褐色	粘土	
	I-b	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質アルト		I-c	10YR3/1	黑褐色	粘土	
	I-c	10YR3/4	暗褐色	粘土		I-d	10YR2/1	黑色	粘土	
本	I-d	10YR4/4	暗褐色	粘土		I-e	10YR4/2	黑褐色	粘土 灰白色粘土をブロック状に含む	
	I-e	10YR4/1	褐褐色	粘土		I-f	10YR4/3	灰褐色	シルト	
	I-f	10YR4/1	褐褐色	粘土		I-g	10YR4/6	浅黃褐色	粘土 青鉄色粘土を斑状に含む	
	I-g	10YR5/1	褐褐色	粘土		I-h	10YR5/2	灰黄褐色	粘土 漂化歯を多量に含む	
附	I-h	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土		I-i	10YR4/2	灰黄褐色	粘土 浅黄褐色粘土をブロック状に含む	
	I-i	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土 廻浜土シルト質粘土をブロック状に含む		I-j	10YR4/1	褐褐色	粘土	
	I-j	10YR6/2	灰黄褐色	粘土		2	2.57V/4	灰褐色	稍干硬シルト	
	I-k	10YR6/4	暗褐色	粘土		3	10YR4/6	灰褐色	粘土 漂化歯を多量に含む	
後	I-k	10YR4/4	暗褐色	シルト質粘土		SE2981	1	10YR4/1	褐褐色	粘土 灰白色粘土を斑状に含む
	I-l	10YR5/2	暗褐色	粘土 明黄褐色粘土を少量含む						
	I-m	10YR3/3	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						
	I-n	10YR3/3	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						
SD1969	I-o	10YR4/1	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						
	I-p	10YR4/1	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						
	I-q	10YR4/1	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						
	I-r	10YR4/1	暗褐色	砂 灰褐色砂土を少量含む						

第4表 第134次調査区土層観察表



第12図 第134次調査区平・断面図 (1/100)

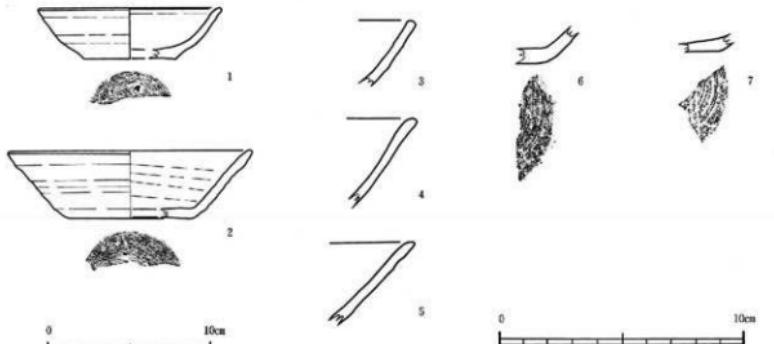


第13図 SB1925・1930・1935エレベーション図 (1/60)



遺物は、SIE2柱穴埋め土から回転糸切り無調整の赤焼き土器D-59壺（第18図5）、内面黒色処理された回転糸切り無調整の土師器D-60壺（第18図4）が、他の掘り方埋め土から土師器片が少量出土している。

SB1930、SD1969、SX1983、SK1967・1978・1982を切り、SD1959・1962に切られている。



探査番号	空縫 塗り	復元 状態	出土 場所 層位	法 長 [cm]	外 面 調 査	内 面 調 査	考 察	写真 複数
1 D-66	赤焼き土器	坪	SD1930 SIE1	幅9.1 深9.1	口縁部～体部クロナデ、底部回転糸切り	口縁部～体部クロナデ	赤	
2 D-61	土師器	坪	SB1930 SIE2	柱窓跡 高42.5、口径15.0、底径7.6	口縁部～体部クロナデ、底部回転糸切り	口縁部～体部クロナデ	赤	
3 D-68	赤焼き土器	坪	SD1930 SIE1	幅9.1 残存高2.7	口縁部～体部クロナデ	口縁部～体部クロナデ	赤	
4 D-69	土師器	坪	SD1930 SIE1	幅9.1 残存高3.7	口縁部～体部クロナデ	口縁部～体部クロナデ	赤・斜面 黒色鉛錆	
5 D-70	赤焼き土器	小II	SD1930 SIE1	幅9.1 残存高3.4、口径1.0	口縁部～体部クロナデ	口縁部～体部クロナデ	赤	
6 D-71	土師器	坪	SHE1969 SIE1	幅9.1 残存高1.5、底径6.6	体部クロナデ、底部回転糸切り	ロコナデ	赤	
7 D-67	土師器	坪	SD1930 SIE1	幅9.1 残存高6.7、底径9.6	体部～ヘラガミ、底部回転糸切り	ヘラミガキ	赤・斜面 黒色鉛錆	

第14図 SB1930建物跡出土遺物

SD1959溝跡 上幅120~165cm、底面幅16~35cm、深さ70~85cmで、断面形は上方が開いたU字形の溝跡である。壁は上方が緩く立ち上がっているが、下半は垂直気味である。底面はやや凹凸がある。方向はE-24°-Nである。堆積土は4層に大別され、第3層の下面と第4層の下面には酸化鉄が集積している。

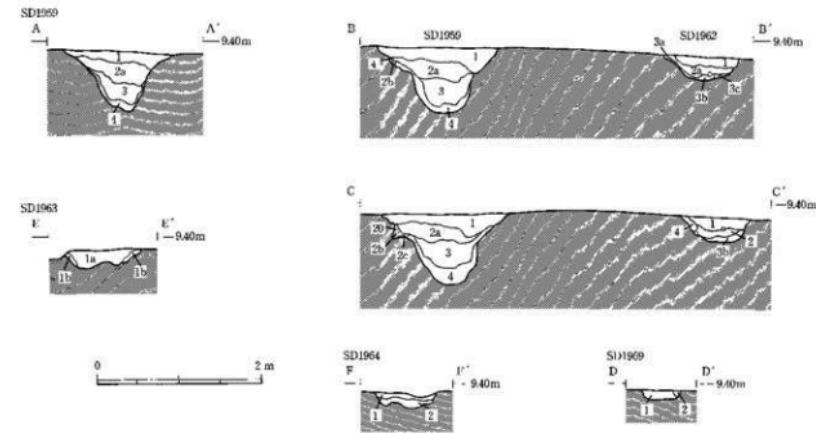
遺物は、第1層中からは両面黒色処理され回転糸切り無調整の土師器D-64坪の底部（第16図4）、第2層中からは両面黒色処理され盤状のC-876皿（第16図5）、幅8mm程のヘラ状工具による叩き痕跡のある須恵器E-431（第16図7）、底部の欠損した須恵器E-432坪片（第16図1）、四面桶巻痕跡、凸面正方格子叩きの平瓦G-106（第16図8）、第3層中からは内面黒色処理され、底部が回転糸切り無調整のうち「×」の書きのある土師器D-63坪（第16図2）、黒色の付着物のある須恵器E-428菱片（写真61）、第4層中からは赤焼き土器のD-65坪片（第16図3）、頭部から口縁部にかけて2条の沈線があり、体部に工字文の施された弥生土器B-289鉢（第16図6）などが出土している。この他に堆積上第1層から第3層中にかけては、土師器、須恵器、赤焼き土器の小片が多量に出土している。それに較べると最下層の第4層からは、土師器片の出土はあるが量はきわめて少ない。

SB1925・1930・1935、SD1963・1969、SX1983、SK1976を切り、SD1964に切られている。

SD1962溝跡 上幅80~105cm、底面幅20~60cm、深さ30cmで、断面形は逆台形の溝跡である。壁は南壁が緩く立ち上がっているが、北壁は垂直気味である。底面はやや凹凸がある。方向はE-26°-Nである。堆積土は4層に大別され、壁面および底面には酸化鉄が集積している箇所がある。



40 SD1962・SD1959溝跡（西より）



層序			上	色	上	性	備考	層序			上	色	上	性	備考
SD1959	(A' - B' - C')							SD1963	(E' - F')						
1	10YR4/1	褐紅色	粘土	無化鉄を少許含む				1 a	10YR3/1	黑褐色	粘土	無化鉄を含む			
2 a	10YR5/2	灰青褐色	粘土	無化鉄を多量に含む				1 b	10YR3/1	黑褐色	粘土	無化鉄を少許含む			
2 b	10YR5/2	灰青褐色	粘土	無化鉄を少許含む				2	10YR3/2	黑褐色	シルト	無化鉄を少許含む			
2 c	10YR5/2	灰青褐色	粘土	白色粘土層状に含む				2 a	10YR4/2	明黄色	シルト	無化鉄を含む			
3	10YR3/1	褐紅色	粘土	無化鉄を多く含む。白色粘土を下部にブロック状に含む				2 b	10YR4/3	灰黃褐色	シルト	無化鉄を含む			
4	10YR7/2	深紅褐色	シルト	無化鉄を多く含む。白色粘土が底部(無化鉄1)している。マニゴンを少許含む。				SD1964	(D' - E')						
				下部に無化鉄が集積(無化鉄2)している。				1	10YR3/1	黑褐色					
				下部に無化鉄が集積(無化鉄2)している。				2	10YR6/2	明黄色					
SD1963	(B' - C')							SD1969	(D' - E')						
1	10YR4/2	灰青褐色	シルト質粘土	無化鉄を少許含む				1	10YR4/1	褐紅色	シルト質粘土				
2 a	10YR4/1	褐紅色	粘土	無化鉄を少許含む				2	10YR4/3	灰黃褐色	シルト	無化鉄を含む			
2 b	10YR3/1	黑褐色	粘土	無化鉄を少許含む											
2 c	10YR3/1	黑褐色	粘土	無化鉄を少許含む											
3	10YR7/2	灰褐色	粘土	無化鉄を少許含む											
4	10YR3/1	黑褐色	粘土	無化鉄を少許含む											

第154図 第134次調査区遺構断面図(1) (1/60)

断面を観察する箇所によっては、溝は2時期あると考えられる。

遺物は、第1層中からSD1957からも出土している底部の欠損した須恵器E-432环片(第16図1)が出土し、この他に堆積土中からは土師器、須恵器、赤焼き土器の小破片が多量に出土している。

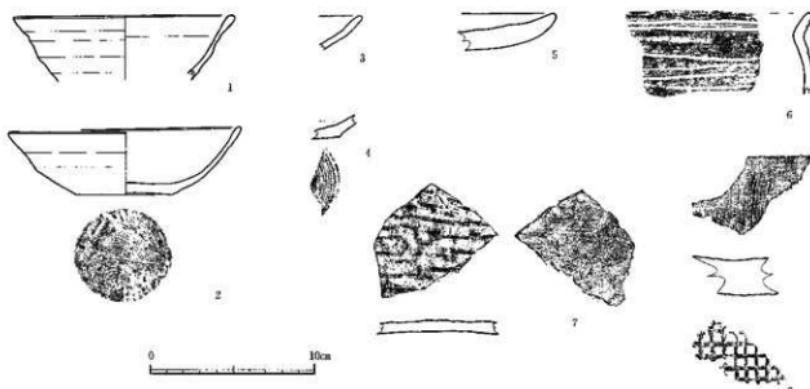
SB1925・1930・1935、SX1983を切り、P1に切られている。

SD1963溝跡 上幅75~100cm、底面幅40~60cm、深さ14~20cmで、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸があり、ピット状に落ち込んでいる箇所がある。方向はN-4°-Eである。堆積土は1層である。

遺物は、扁平なツマミを有する大型の須恵器E-430蓋片(写真67)や、土師器、須恵器、赤焼き土器の破片が出土している。

SD1959に切られている。

SD1964溝跡 上幅75~95cm、底面幅62~85cm、深さ12~15cmで、断面形は扁平な逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が著しく、ピット状に落ち込んでいる箇所がある。方向はN-7°-Wである。堆積土は2層である。



加算 番号	資料 番号	材質	器形	出土場所 SD1969	出土地点 SD1969	法 身 (cm)	外 形 調 査	内 面 調 査	傳 考	参考 図版
1	E-132	陶器	鉢	SD1969	1, 2	残存高16、口径(13.4)	口縁部～体部ロクロナゲ	口縁部～体部ロクロナゲ	「×」痕有り	55
2	D-63	上部器	环	SD1969	1, 2, 3	直径4.0、口径4.2、成形3	二端部～各部ロクロナゲ、底部側面切欠	厚底部より不明	「×」痕有り	50
3	D-65	下部器	环	SD1969	2	残存高21	「縫接部～各部ロクロナゲ」	口縁部～体部ロクロナゲ	「×」痕有り	60
4	D-64	上部器	环	SD1969	1	残存高13	底部～ハミガキ、底面側面切欠	ハラミガキ	内・外西面色地銀	60
5	C-876	下部器	盘	SD1969	1, 2	残存高23	ミガキ	ミガキ	内・外白～白色地銀	60
6	B-289	赤土器	鉢	SD1969	4	残存高5.1、口径(16)	口縁部～ギヤー波紋 体部側面LRK波紋～比較	体部ミガキ	「×」痕有り	57
7	E-431	底部器	环	SD1969	2	不明	不明	ヘラナゲ	「×」痕有り	58
8	G-106	瓦	平瓦	SD1969	2	内裏筋字跡(正方筋子)	表面有直筋	「×」痕有り	「×」痕有り	58

第16図 第134次調査溝跡出土遺物

遺物は、土師器片3点、鉢洋1点が出土している。

SD1959を切り、SK1967に切られている。

SD1969溝跡 上幅40~70cm、底面幅26~50cm、深さ10~15cmで、断面形は逆台形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がるが、部分的に垂直気味となる箇所がある。底面はほぼ平坦である。方向はN-51°-Eで、やや蛇行している。堆積土は2層である。

遺物は、土師器、赤焼き土器片が少量出土している。

SK1978を切り、SB1925・1935、SD1959・1964に切られている。

SD1979溝跡 上幅80cm以上、底面幅50cm以上、深さ28cmで、断面形は逆台形と推定される溝跡である。壁は直線的に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はE-20°-Nで、調査区北西端で溝の一部を検出した。堆積土は3層である。

遺物は、第1層中から陶器片3点が出土した他、堆積土中から土師器、瓦片が少量出土している。

SE1981に切られている。

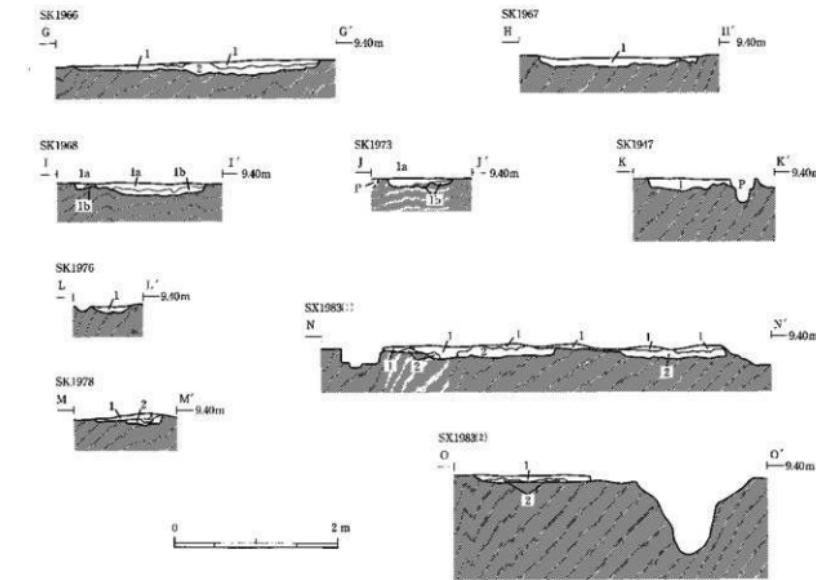
SK1966土坑 東西0.45~1.15m、南北3mの土坑で、深さは4~17cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は2層である。遺物は出土しなかった。

SK1967土坑 東西2.0m、南北1.4~1.85mの土坑で、深さは4~9cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は、G-108平瓦(第18図9)と赤焼き土器片が少量出土している。

SD1964を切っている。

SK1968土坑 東西2.0m、南北1.4~1.85mの土坑で、深さは4~9cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は



剖面	土色	土性	層
SK1976 (G-G')			
1 JOYR4/2 深青褐色	粘土	鐵化物を斑状に含む	
2 JOYR5/3 深紅褐色	粘土		
SK1969 (H-H')			
1 JOYR4/1 鮎灰褐色	粘土	高鈣色粘土をブロック状に含む	
SK1969 (I-I')			
1 a JOYR5/3 暗褐色	シルト		
1 b JOYR5/6 黄褐色	粘土	暗褐色土をまばらに散在し含む	
SK1973 (J-J')			
1 a JOYR5/4 深紅褐色	粘土		
1 b JOYR6/4 暗黃褐色	粘土	に深い青褐色粘土を少量含む	
SK1974 (K-K')			
1 JOYR4/3 深紅褐色	粘土	青褐色粘土上を斑状に含む	

剖面	土色	土性	層
SK1976 (L-L')			
1 JOYR5/4 に深い青褐色	粘土	青褐色粘土上を斑状に含む	
SK1978 (M-M')			
1 JOYR5/2 深黃褐色	シルト質粘土	鐵化物を少量含む No.304, No.305の上部岩を含む	
2 JOYR5/4 に深い青褐色	シルト質粘土	青褐色粘土板を斑状に含む	
SX1983(1)			
1 O-1			
2			
SX1983(2)			
O-O'			
1			
2			

第17図 第134次調査区遺構断面図(2) (1/60)

やや凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は、土師器瓦片と須恵器瓦片が少量出土している。

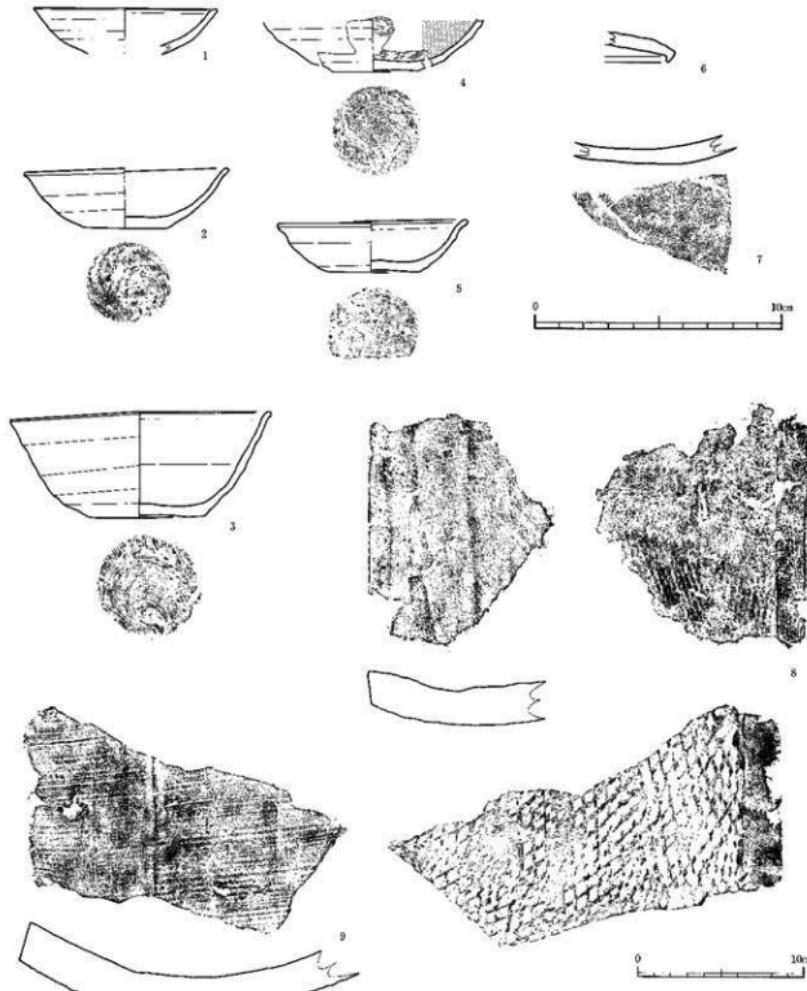
SK1973土坑 東西0.45m、南北0.8mの土坑で、深さは4~10cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸がある。堆積土は1層である。

遺物は、土師器瓦片が2点出土している。

SK1974土坑 東西0.5m、南北1.05m以上の土坑で、深さは6~15cmである。壁は直線的に立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

SB1925S2E1を切り、SB1935S2E1に切られている。

SK1976土坑 東西0.4~0.6m、南北0.5m以上の土坑で、深さは7~9cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。堆積土は1層である。



記載番号	参考番号	種別	形	出土地点		推定 (m)	外面 製法	内面 製法	備考	参考文献
				出土遺物	備註					
1	D-62	素焼き土器	环	SK1978	1	殊器約2.5、山脚(0.1)	口部裏~体部クロナラ	口部裏~体部クロナラ	65	
2	D-57	素焼き土器	环	SK1978	1	器底約2.7、口幅12.3、底径6.0	口部裏~体部クロナラ	口部裏~体部クロナラ	66	
3	D-58	七輪器	环	SK1978	1	器底6.5、口径13.0、底径6.3	口部裏~体部クロナラ、底部周縁部切欠き	口部裏~体部クロナラ	61	
4	D-60	七輪器	环	P.D.		残在高3.1、口径13.4、底径5.2	器底裏クロナラ、底部周縁部切欠き	器底裏クロナラ~テラコザ	63	
5	D-59	上衣着	环	P.F.		器底3.3、口径9.1、底径5.5	器底裏~体部クロナラ、底部周縁部切欠き	器底裏クロナラ~テラコザ	62	
6	Z-429	酒呑目	素	残在12.2、口径10.0			口部裏~体部クロナラ	口部裏~体部クロナラ	70	
7	C-873	L型器	环	カララン		残在高1.5	ロジウナラ	ロジウナラ	60	
8	G-107	灰瓦	环				ケズリ、底面「×」痕あり	ケズリ	72	
9	C-108	灰瓦	环	SK1967	1		内面表面凹凸有し	内面表面凹凸有し	65	

第18図 第134次調査区出土遺物

遺物は、赤焼き土器片が少量出土している。

SB1925S3E1抜き取り穴、SB1935S3E1、SD1959に切られている。

SK1978土坑 長軸1.3m以上、短軸0.84mの土坑で、深さは3~13cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は北半がピット状に落ち込んでいる。堆積出は2層である。

遺物は、第1層中から内面黒色処理され底部が回転糸切り無調整の土師器D-58坏（第18図3）、回転糸切り無調整の赤焼き土器D-57坏（第18図2）、D-62坏（第18図1）が出土し、その他に堆積土中から土師器、赤焼き土器、須恵器片が少量出土している。

SB1925S1E2、SB1935S1E2、SD1969に切られている。

SK1982土坑 長軸1.2m以上、短軸0.3mの土坑である。壁は垂直気味に立ち上がる。

遺物は、ロクロ使用の土師器赤焼き土器片が少量出土している。

SB1925S2E3抜き取り穴、SB1935S2E3、SD1959に切られている。

SE1981井戸跡 東西0.9m、南北0.8m以上で、深さは50cm以上の井戸跡と推定される。壁は直線的に立ち上がる。

遺物は、土師器壺片が少量出土している。

SD1979を切っている。

SX1983 調査区の西部中央で検出した遺構である。規模は、東西16m、南北5.0mで、底面には凹凸があり、東南部では浅くなっている。堆積土は2層で、基本層位第IV層にきわめて類似している。堅穴住居跡の掘り方底面の残存部の可能性がある。

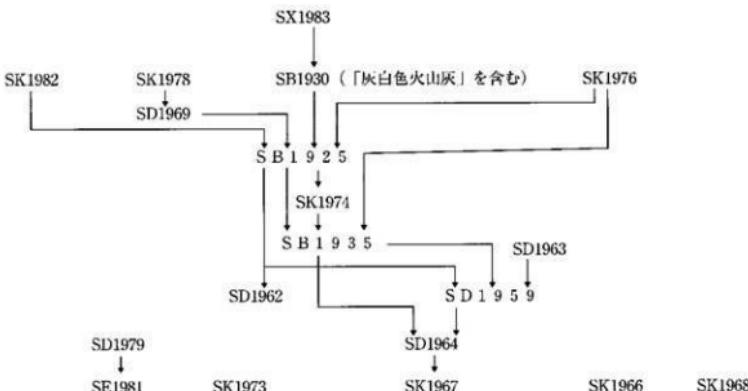
遺物は、土師器、赤焼き土器片が出土している。

SB1925・1930・1935、SD1959・1962、SK1982に切られている。

この他に表上から須恵器E-429壺（第18図6）が、攪乱からは土師器C-873坏（第18図7）、G-107半瓦（第18図8）などが出土している。

(3) まとめ

第134次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡6条、土坑8基、井戸跡1基、性格不明な遺構1、ピットなどである。主な遺構の重複関係を整理すれば次のとおりである。なお並列関係は、必ずしも同時性を示すものではない。



第134次発掘調査は、方四町Ⅱ期官衙中枢部を構成する東建物列に接した地点である。中枢部に隣接する外側はこれまでの調査から、17m～20mの幅で空隙地となっている。今回の調査地点は東の建物列に接し、その外（東）側が同じように空隙地となっているかどうかを明らかにするために実施した。

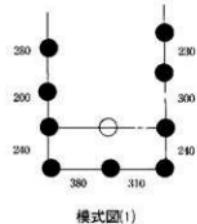
発掘調査の結果、この調査区からは3棟の掘立柱建物跡や溝跡が発見された。そのうちSB1930建物跡は、柱痕跡が直径20～28cmで、柱の掘り方とも一辺が1mを越えるものであった。官衙中枢を構成している建物跡と同様の規模で、掘り方に含まれる火山灰の存在（註1）も含め、周辺で発見されている建物跡には見られない特徴があった。

SB1930建物跡は、柱の配置からは東西2間、南北4間以上の南面に廻を有する建物跡である。しかし梁行きの方向が2間の建物跡で、梁の部分に廻が取りつく構造の建物跡は古代の建物としては一般的ではない（註2）。また桁行の柱間寸法が究めて不揃いな点もある。模式図(1)に示したように西の桁行方向の柱で、柱間寸法は240cm+200cm+280cmであるのに対し、東の桁行方向の柱間寸法は240cm+300cm+230cmとなって、柱間寸法に140cmもの違いが生じている。これはSB1930建物跡を切っているSB1925建物跡にも見られ、模式図(2)のように西の桁行方向の柱間寸法で210cm+280cm+290cm、東の桁行方向では210cm+200cm+420（200・220）cmとなって、柱間寸法そのものに違いがあるのではないかということが想定される（註3）。このように著しい柱間寸法の違いは、これまでの官衙の官舎として発見された建物跡とは、大きな違いを見せている。

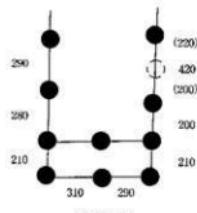
またこれまで掘立柱建物跡の柱穴からは年代について検討可能な遺物は、ほとんど出土していなかった。今回発見されたSB1930建物跡のS 1 E 1 柱穴からは破片ではあるが、ロクロ使用の上器片や赤焼き上器片がともに出土（第14図）し、9世紀末以降10世紀の中頃までの遺物と考えられる（註4）。

さらにSB1930建物跡の柱穴の全てから灰白色の火山灰がブロック状にしかも多量に検出されている。これについては東北地方の古代遺跡で検出されている「灰白色火山灰」と類似していることから分析したこと（I. 8 参照）、十和田a火山灰であることが確認された。これはいわゆる「灰白色火山灰」として報告されているもので、10世紀の前半代に降下したもの（註5）とされている。この火山灰が地表に一定の深さで堆積した後に、柱を立てるための掘り方を掘らなければ各柱穴に均一に火山灰が入りこむことは考えられず、SB1930建物跡は灰白色火山灰が降下した後に建てられた建物であろう。よって上器の年代や火山灰の存在から、SB1930建物跡や重複からその後に建てられたSB1925、SB1935も10世紀前半以降の建物跡と考えられよう。官衙としての下限年代を示す遺物は、第107次調査のSX1616から出土した遺物により、8世紀前半代と考えている（註6）。それより10世紀前半までの間の遺構、遺物は、ほとんど発見されていない（註7）。官衙廃絶後にやや時期をへだてて屋敷などの建物が立てられたと考えられる。

これらの建物跡を切るようにSD1959溝跡、SD1962溝跡が調査区を横断するように発見されている。SD1959溝跡の方が深く、肉溝の深さには違いがあるが、E-24°-N方向で2m離れ平行して延びている。さらに底面に酸化鉄の集積が著しいこと、同一個体の遺物（E-432杯）が出土していること、ともに出上器のうち土器類は土師器、須恵器、赤焼き土器に限られ、全く陶磁器類を含んでいないことなどから、古代末期に同時に存在していた可能性が強い。このような溝の在り方からは、道路跡や屋敷跡の区画などが考えられる。今のところ同調査区周辺では、同様の遺構は検出されていない。またこれらの溝を境にして小柱穴の存在が多くなるなどの遺構の様相に大きな変化は今のところ見られない（註8）。前述の3棟の掘立柱建物跡を含め、官衙廃絶後の遺構の在り方については今後の調査のなかで検討して行きたい。



模式図(1)



模式図(2)

- 註 1 本書 P22 SB1930建物跡 写真35、36参照
- 註 2 郡山遺跡で発見された建物跡の中で、このような形状の建物跡は発見されていない。また南から2列目の中央の柱を両仕切りの柱穴と見ることもできるが、SD1959溝跡に切られているが元来の掘り方は残存する断面の観察からは、大形の柱穴と想定され、廻付建物の身舎の柱穴と見ておく。
- 註 3 SB1930、1925とも桁行方向の柱が東西で対応する位置になく、上部で梁材を直接組み上げるのは困難である。またSB1935も西桁行方向の柱間寸法は210cm+210cm+200cm+220cm、東桁行方向は240cm+220cm+340(200+140)cmとなっており、一定していない。
- 註 4 宮城県教育委員会 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」政府跡 本文編 1982
宮城県多賀城跡調査研究所年報1991「多賀城跡」 III 第61次調査
- 註 5 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』 1980
秋田県教育委員会 秋田県教育庁払田柵調査事務所「秋田県文化財調査報告書289集「払田柵跡Ⅱ一区西施設」」 1999.3
灰白色火山灰については、陸奥国分寺七重塔の消失に伴う焼土層が白土（灰白色火山灰）の上を覆っているため、「日本紀略。承平四年（934）閏正月15日条の「陸奥国々分寺七重塔が雷火被燒了」から、934年が火山灰の降下年代の下限と考えられている。また払田柵跡の調査により、C期材木列の年輪年代測定から灰白色火山灰の降下は907年以降、D期の917年+a以前という見解が出されている。したがって本書では907年以降、934年までの間と考えている。なお本書のI. 8「郡山遺跡 SB1930建物跡出土上のテフラ分析」では分析者が「和田a火山灰の降下年代を『扶桑略記』延喜十五年（915）7月13日条の『出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由』の記事から、915年とする見解を取っている。
- 註 6 第107次調査 仙台市文化財調査報告書第210集「郡山遺跡 XVI 平成7年度発掘調査概報」 P34 III.3 1996.3
- 註 7 この調査区周辺で10世紀前半代の遺構と考えられるのは以下のものである。
第55次調査 SI776 仙台市文化財調査報告書第86集「郡山遺跡 VI—昭和60年度発掘調査概報—」 P49 1986.3
第107次調査 SK1577 仙台市文化財調査報告書第210集「郡山遺跡 XVI—平成7年度発掘調査概報—」 P23 1996.3
- 註 8 今回の第134次調査区より東方に120m離れた第117次調査区では、小柱穴が集中し14世紀前半以降の遺構群が発見されている。
仙台市文化財調査報告書第234集「郡山遺跡 XIX 平成10年度発掘調査概報--」 1998.3



41 第134次調査区全景（北より）



42 第134次調査区全景（東より）



43 SK1978土坑遺物出土状況(1)



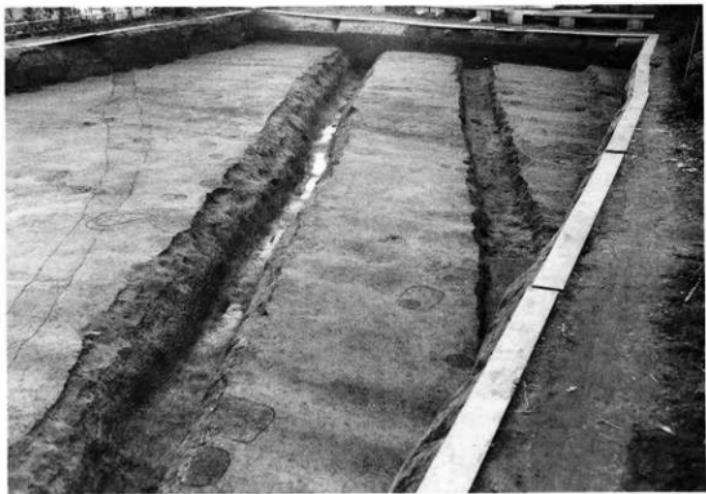
44 SK1978土坑遺物出土状況(2)



45 SD1959溝跡断面(A-A')



46 SD1959溝跡断面(B-B')



47 SD1959溝跡・SD1962溝跡(東より)



48



49



50



51



52



53



54



55



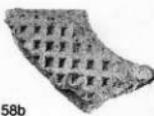
56



57



58a



58b



59



60a



60b



61



62



63

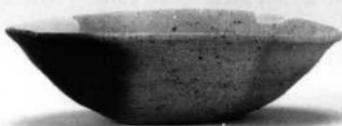
48	D-61	坏	SB1930	57	E-431	甃	SD1959
49	D-66	坏	SB1930	58a	G-106	平瓦	SD1959
50	D-71	坏	SB1930	58b	G-106	平瓦	SD1959
51	D-68	坏	SB1930	59	D-65	坏	SD1959
52	D-69	坏	SB1930	60	D-64	坏	SD1959
53	C-70	小皿	SB1930	61	E-428	甃	SD1959
54	D-67	坏	SB1930	62	D-59	坏	SB1935
55	D-63	坏	SD1959	63	D-60	坏	SB1935
56	B-289	鉢	SD1959				



64



65



66



67



68a



68b



69



70



71



72

64	D-58	坏	SK1978	69	C-873	坏	カクラン
65	D-62	坏	SK1978	70	E-429	蓋	表土
66	D-57	坏	SK1978	71	C-874	坏	表土
67	E-430	蓋	SD1963	72	G-107	平瓦	カクラン
68a	G-108	平瓦	SK1967				
68b	G-108	平瓦	SK1967				

5. 第135次発掘調査

(1) 調査経過

第135次調査区はⅠ期官衙の東南部で東辺上に位置している。この地点は平成3年度に宅地造成に伴い第93次調査として実施したが、原因者の事情により調査が中断していた箇所である。第93次調査では、平安時代の水田跡に伴う畦畔2、擬似畦畔1、Ⅰ期官衙ないしそれ以前の堅穴住居跡1軒、Ⅰ期官衙段階の堀立柱建物跡1棟、溝跡等(一部材木列の可能性を示すもの)、Ⅱ期官衙段階の溝跡1条等を検出し、弥生土器、土師器、須恵器などが出土していた(註1)。その際にⅠ期官衙の東辺に該当する材木列を検出したところで調査が中断されていた。Ⅰ期官衙東辺の詳細について把握するために今回は第93次調査区の中央部に改めて調査区を設定し、発掘調査を実施した。

調査区の現況は、仙台市土地開発公社の所有地となっている。表上の厚さは20~30cm程である。7月14日より表土排除を行ったが、梅雨時の調査であったことや、旧水田のため湧水が著しく遺構検出作業が困難であった。埋め戻し及び整地作業など全ての作業が終了したのは11月10日である。

(2) 発見遺構・出土遺物

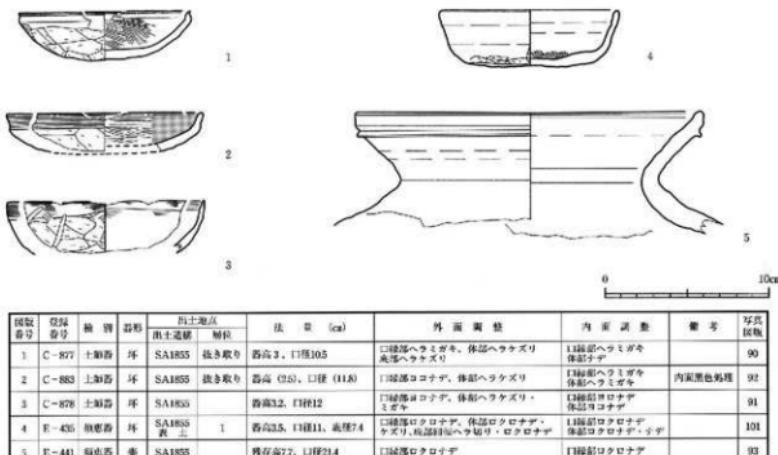
今回の調査で発見された遺構は、抜き取り痕跡を伴う材木列2列、堅穴住居跡1軒、溝跡7条、土坑4基、ピットなどである。これらの遺構は基本層位V層上面で検出した。材木列はこれまで推定された東辺上での検出である。

SA1855材木列 調査区西端で検出した材木列である。抜き取り溝底面まで掘り下げたところ、N-35°-E方向の上幅50cm程の材木列掘り方が検出され、そのほぼ中心部に直径10~25cmの柱痕跡が検出された。検出した総長は6.9mである。抜き取り痕跡が掘り方底面まで及んでいる箇所もある。抜き取りの深度が浅い部分では、直径5~15cmの柱痕跡が連続して確認された。

遺物は掘り方より、関東系の土師器C-878环(第20図3)、須恵器E-441亮(第20図5)、土師器麿、須恵器片



第19図 第135次調査区位置図



第20図 SA1855木材列出土遺物

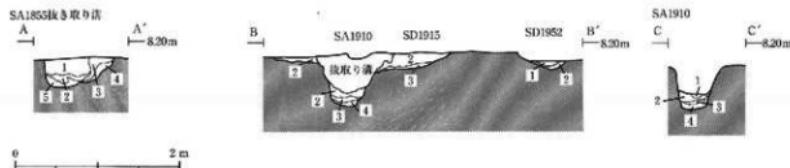
が出土している。

SD1356に切られる。

SA1855木材列抜き取り溝 SA1855木材列の掘り方と同方向に調査区外に延びている。検出した大部分では木材列掘り方底面まで及んでいる。抜き取り溝は上幅90~110cm、深さ35cm程、断面U字形である。埋土は白色粘土をブロックに含む黒褐色粘土で人為的に埋め戻されている。

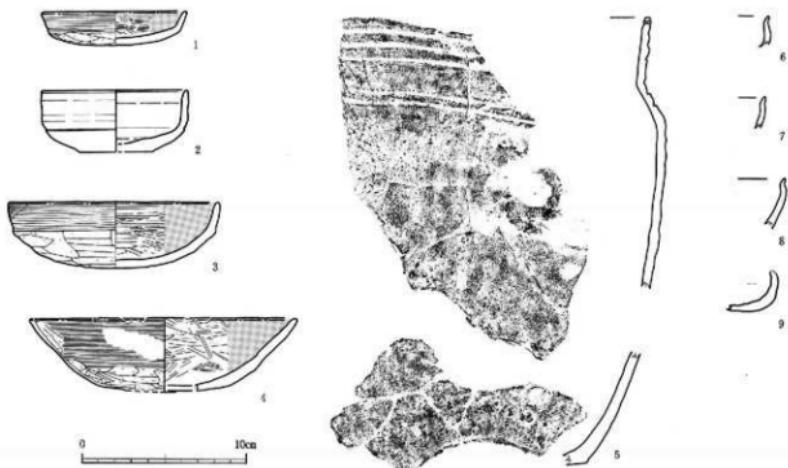
遺物は内面黒色処理された土師器C-883坪（第20図2）、関東系の土師器C-877坪（第20図1）、須恵器E-435坪（第20図4）、縄文土器片、土師器高杯脚部片、須恵器片などが出土している。

SA1910木材列 南北に延びる木材列で、中央部で屈曲する。方向は北半部ではN-37°-E、南半部ではN-



層 位	上 色	上 性	備 考
SA1855抜き取り溝 A-A'			
1	10YR8/2 黒褐色	粘土	
2	10YR8/4 浅黄褐色	粘土	鐵化鉄を少許含む
3	10YR9/4 にふい灰褐色	粘土	白色粘土をブロック状に含む
4	10YR8/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
5	10YR2/2 黑褐色	粘土	白色粘土をブロック状に含む
SD1915 B-B'			
1	10YR5/1 黑褐色	粘土	
2	10YR5/2 灰黃褐色	砂質粘土	人為堆積
3	10YR5/6 黑褐色	粘土	
SD1952 B'-B'			
1	10YR2/1 黑色	粘土	V器（褐色土）を含む
2	10YR3-2 灰褐色	粘土	

第21図 第135次調査区遺構断面図(1) (1/60)



図版 番号	笠置 寺号	種 別	形 形	出土点		法 番 (cm)	外 壁 調 整	内 面 調 整	固 容	写 真 番号
				古文書地	層 位					
1 C-878	土師器	环	SA1910 SD1915	抜き取り	2	器高21.1口径8.7	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズ、ヘラタ ズリ、底面ヘラクズリ	口縁部ヘラケズ、ミドキ 体部ヘラケズ、ミドキ	内面黑色處理	96
2 E-434	須恵器	环	表土	器高26.1口径9.8底径4.4			口縁部ヨコナデ、底面時々ヘラケズリ のちヨコナデ、成形時ヘラケズリ	口縁部ヘラケズ	内面黑色處理	100
3 C-881	土師器	环	SK1954 SDX19	Ⅳ解下部	器高46.5口径12.3		口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズ、底面 ヘラケズリ	口縁部ヨコナデ 体部ヘラケズ	内面黑色處理	114
4 C-880	土師器	环	SD1915	2解下部	器高45.0口径16.2		口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ、底面 ヘラケズリ	口縁部ヘラケズ 体部ヘラケズ	内面黑色處理 内面有り	97
5 A-2	綱文土器	鉢	SA1910 SD1907	3	残高15.4	波状口縁波線ヨコナキ、BL複文		ミドキ		95
6 C-885	土師器	环	SD1915	抜き取り	残高20.0	口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ		口縁部ナデ		
7 C-886	土師器	环	SA1910	抜き取り	残高20.0	口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ		口縁部ナデ		
8 C-884	土師器	环	SA1910	抜き取り	残高3.2	口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ		口縁部ナデ		
9 E-433	須恵器	不明品	SD1915	1	残高2.55	ロクロナデ、ヘラケズリ		ロクロナデ		

第22図 第135次調査区出土遺物

31° - Eである。上幅20~30cmで、抜き取りの深度が浅い部分では、直径5~15cmの柱痕跡が確認された。検出した総長は7.2mである。掘り方底面まで完全に抜き取られている箇所がある。断面観察では材木列掘り方壁面は直立ぎみに掘り込まれ、深さは30cm程度である。

遺物は土師器小破片が1点出土したのみである。

SD1915を切り、SD1936・1949に切られる。

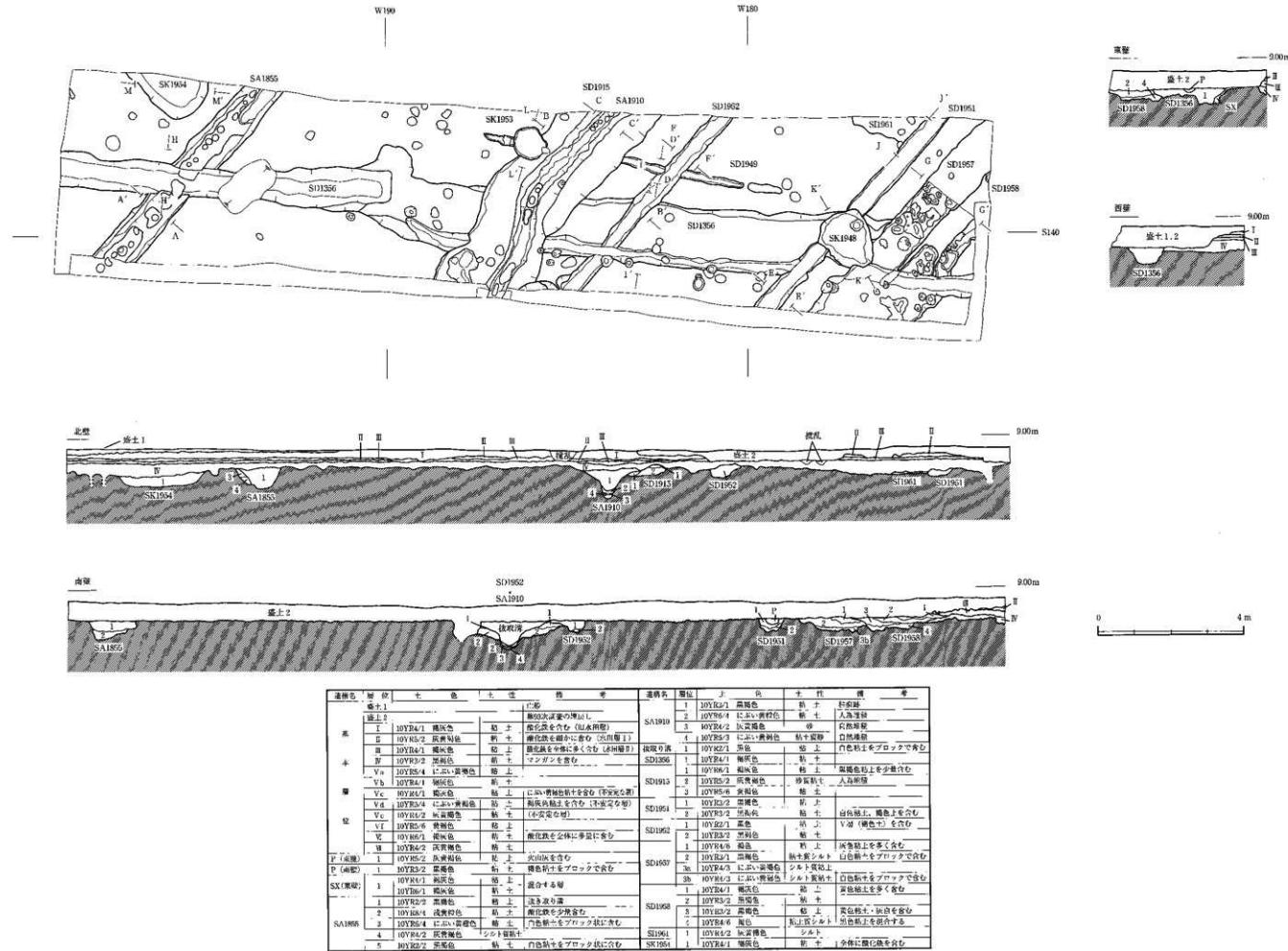
SA1910材木列抜き取り溝 SA1910材木列の掘り方と同方向に調査区外に延びている。検出した部分の多くは抜き取りの深度が深く、材木列掘り方底面にまで及んでいる。抜き取り溝は上幅100cm程、深さ50cm程、断面形はU字形である。

遺物は内面黑色処理された土師器C-879环（第22図1）、関東系の土師器C-884环（第22図8）、土師器C-885环（第22図6）、土師器C-886（第22図7）などが出土している。

SD1915溝跡 調査区中央部で検出した溝跡であり、上幅200~230cm、底面幅150~190cm、断面は扁平なU字形の溝跡である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向は北半部ではN-36°-E、南半部ではN-6°-Eであり、中央部で屈曲がある。検出した総長は7.2mである。

遺物は内面黑色処理された土師器C-880环（第22図4）、須恵器E-433环あるいは壺片（第22図9）、須恵器壺、土師器壺、底面から綱文土器A-2鉢（第22図5）などが出土している。

SD1936・1949、SA1910、SK1953に切られる。



第23図 第135次調査区平・断面図 (1/100)

SD1356溝跡 調査区を東西に横断する溝跡である。東半部と西半部では幅や深さなどの形状が異なる。西半部は上幅80~120cm、底面幅30~50cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。東半部は、上幅160~200cm、底面幅10~30cm程、壁は南側はやや直立気味に立ち上がるが、北側に幅100~120cmの平場状の段を有する。底面はほぼ平坦である。方向はE-2°-Sで、検出した総長は約26mである。

遺物は堆積土より上部器坏、底面より上部器片、須恵器壺、鉄製品などが出上した。

SA1855・1910、SD1915・1951・1952・1957・1958を切り、SK1948に切られる。

SD1949溝跡 上幅20~25cm、底面幅15cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。方向はN-4°~5°-Sで、検出した総長は8.4mである。

遺物は出土していない。

SD1915・1952、SA1910を切る。

SD1951溝跡 上幅50~60cm、底面幅35~40cm、断面形は舟底形の溝跡である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。方向はN-34°-Eで、検出した総長は7.2mである。

遺物は上部器の小破片が出土した。

SK1948、SD1356に切られる。

SD1952溝跡 上幅40~50cm、底面幅20~30cm、断面形は逆台形の溝跡である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。方向はN-35°-Eで、検出した総長は6.5mである。

遺物は出土していない。

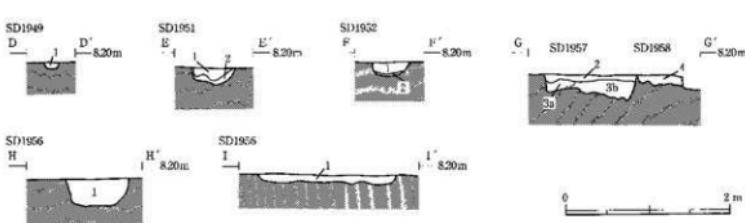
SD1356・1949に切られる。

SD1957溝跡 上幅100~110cm、底面幅90cm程、断面形は逆台形の溝跡である。壁は直立して立ち上がり、底面は凹凸が著しい。方向はN-34°-Eで、検出した総長は7.5mである。

遺物は第3層より縄文土器A-2鉢(第22図5)が出土した。

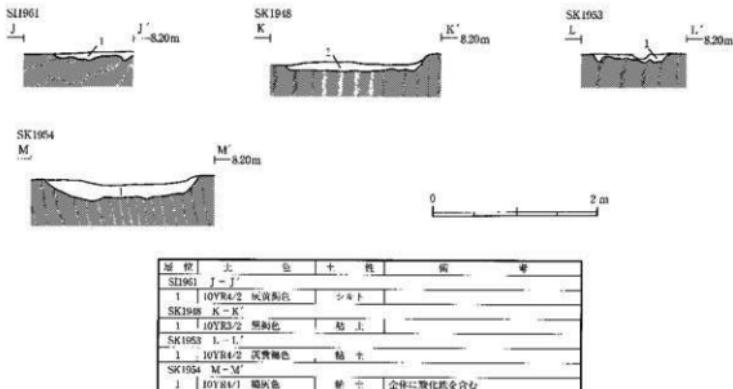
SK1948、SD1356に切られる。

SD1958溝跡 上幅50~70cm程の溝跡であり、調査区東端で遺構の一部を確認した。方向はN-35°-Eで、検出した総長は5.4mである。



層位	上色	上性	底	考	層位	上色	上性	底	考
SD1949 D-D'					SD1957 G-G'				
1 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト				1 10YR4/1 黑褐色	防土質シルト	白色粘土をブロックで含む		
SD1951 E-E'					2 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土			
1 10YR5/2 黄褐色	粘土				3a 10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	白色粘土をブロックで含む		
2 10YR5/2 黑褐色	粘土	白色粘土、褐色土を含む			3b 10YR4/6 にぶい黄褐色	シルト質粘土	白色粘土をブロックで含む		
SD1952 F-F'					SD1958 G-G'				
1 10YR4/2 黒色	粘土	V層(黒褐色)	を含む		4 10YR4/6 黑褐色	粘土質シルト	黑色粘土を認む		
2 10YR4/2 黑褐色	粘土				SD1956 H-H'				
					1 10YR4/1 海灰色	粘土			
					2 10YR4/1 海灰色	粘土			

第24図 第135次調査区遺構断面図(2) (1/60)



第25図 第135次調査区遺構断面図(3) (1/60)

遺物は第4層より繩文土器片1点のみが出土した。

SD1356に切られる。

SK1948土坑 長軸1.70m、短軸1.20mの楕円形を呈する土坑で、深さは10~15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

遺物は出土していない。

SD1356を切る。

SK1953土坑 南北1.00m程のほぼ円形を呈する土坑で、深さは10cm程度である。壁はやや直立気味に立ち上がり、底面は凹凸がある。

遺物は出土していない。

SD1915を切り、SD1949に切られる。

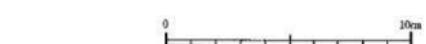
SK1954土坑 調査区北西隅で遺構の一部を検出した遺構であり、詳細は不明である。壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面は多少凹凸があるがおむね平坦である。

遺物は内面黒色処理された土器C-881杯(第22図3)、須恵器片、その他土器小破片が多数出土した。

SI1961竪穴住居跡 調査区北東隅で遺構の一部を検出したが、平面形の規模ならびに底面の形状から竪穴住居跡の掘り方と推定した。詳細は不明である。

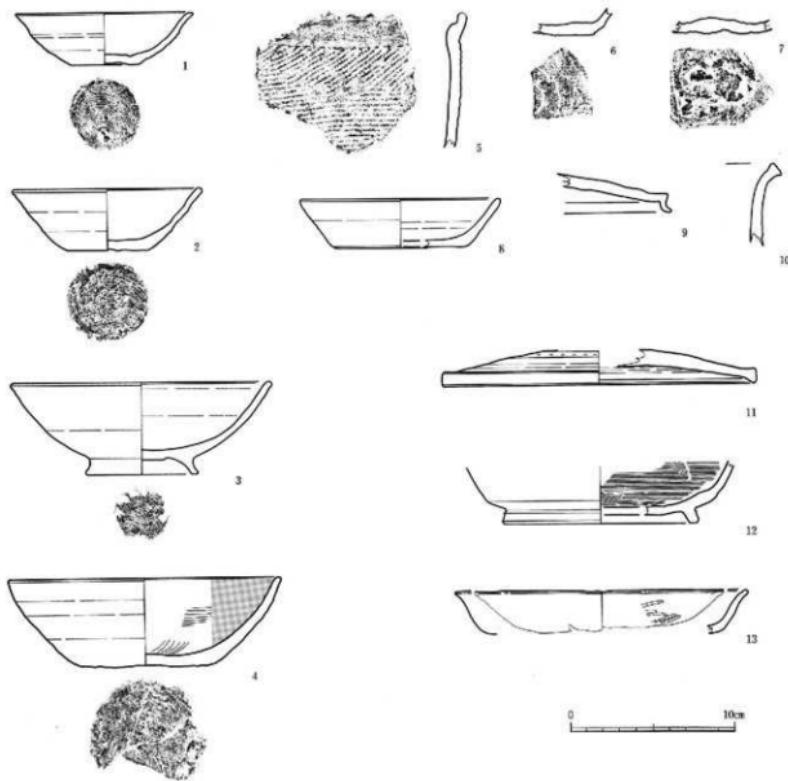
SD1961を切る。

その他に、表土中より須恵器E-434杯(第22図2)、攪乱より石器K-246剥片(写真99)が出土している。



層名 番号	層 名	性	形	出土点	法面 (cm)	外面測定	内面測定	参考 書	参考 図版
1 三-462	須恵器	へき石	圓筒形 直口	V字底	11.5			113	
2 F-440	石器等	巻	直口	直底	10.5 10.25	内面有1.8 外側有3.25	ロクロナデ ロクロナデ	108	

第26図 第135次調査区(93次)出土遺物(1)



調査 番号	目録 番号	種 別	器形	出土場所		計 算 (cm)	外 観 調 査	内 面 調 査	備 考	写真 番號
				出土上緒	層 次					
1	D-75	串焼き土器	环	Ⅰ区	吉野	直径32、口径11.0、底径4.2	口縁部・体部クロナデ 底面削痕あり切り	口縁部 体部クロナデ		102
2	D-74	串焼き土器	环	Ⅱ区	吉野	直径32.0、口径11.7、底径5.0	口縁部・体部クロナデ 底面削痕あり切り	口縁部 体部クロナデ		105
3	D-72	土器	直筒身土器	Ⅱ区	V型土器	直径37.0、口径16.1、底径6.9	口縁部・体部クロナデ 底面削痕あり切り	口縁部 体部クロナデ	内面褐色風漬	103
4	D-73	土器	环	Ⅱ区	吉野中	直径34.0、口径16.8、底径6.0	口縁部・体部クロナデ 底面削痕あり切り	口縁部 体部クロナデ	内面黒色風漬	104
5	A-3	横文土器	器	カクラン		残存高7.5	継縫ミガキ 継縫・縦縫LR既定	継縫ミガキ		
6	E-439	直筒器	环	Ⅱ区	V型土器	残存高16.0、底径3.0	体部クロナデ 底面削痕あり切り	ロクロナデ		
7	E-444	直筒器	环	Ⅱ区	吉野	残存高9.0	底面削痕あり切り・無漏管	ロクロナデ		
8	E-443	直筒器	环	Ⅱ区	吉野	直径30.5、口径12.4、底径 3.0	口縁部・体部クロナデ 底面削痕・へきりのち・ラケズリ	口縁部 体部クロナデ	110	
9	E-445	直筒器	直	Ⅱ区	吉野	残存高25.0、口径12.0	ロクロナデ・口縁ヘラケズリ	ロクロナデ		112
10	E-438	直筒器	直筒器	Ⅱ区	V型土器	残存高33.1、口径 0.4	ロクロナデ	ロクロナデ		111
11	E-436	直筒器	直	Ⅱ区	V型土器	残存高21.0、口径9.2	ロクロナデ・口縁ヘラケズリ	ロクロナデ		106
12	E-437	直筒器	环	Ⅱ区	V型土器	残存高33.5、口径11.8	体部・底面クロナデ	ロクロナデ		107
13	C-892	土器器	环	Ⅱ区	V型土器	残存高26.0、口径10.8	口縁部・体部クロナデ	ロクロナデ・体部既定 ナデ・ミガキ		109

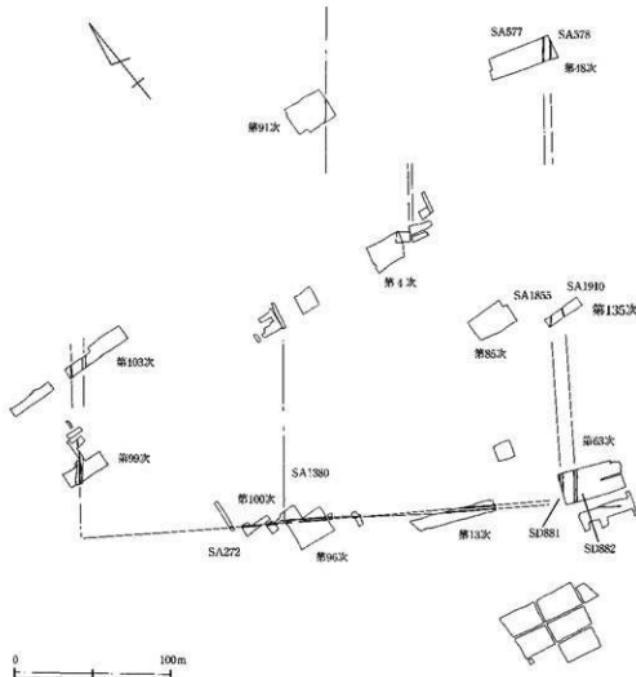
第274図 第135次調査区(93次)出土遺物(2)

また、第93次調査区からは縄文土器A-3鉢（第27図5）、畿内地方で出土する上部器と同じ特徴をもつ土器C-882杯（第27図13）、D-72高台付杯（第27図3）、D-73杯（第27図4）、赤焼き土器D-75杯（第27図1）、須恵器E-436蓋（第27図11）、須恵器E-437高台付杯（第27図12）、須恵器E-438短頭甌（第27図10）、須恵器E-439杯（第27図6）、須恵器E-440蓋（第26図2）、須恵器E-442不明品（第26図1）、須恵器E-443杯（第27図8）、須恵器E-444杯（第27図7）、須恵器E-445蓋（第27図9）などが出土している。

(3) まとめ

第135次調査区は昭和59年度の第48次調査区と昭和61年度の第63次調査区の中間に位置し、第48次調査で発見されていたSA577とSA578、第63次調査で発見されていたSD881とSD882の間を結ぶ材木列の発見を主目的としていた。

これまでの調査からI期官衙南部の様相は、官衙南限を区画する材木列が平成4年度の第96次調査でSA1380からSA272への2小期の変遷が確認され、SA272はさらに西へ伸びており、官衙が西方へ拡大したと考えられている（註2）。またI期官衙西辺を調査した平成5年度の第99次調査では、SD1429→SD1394→SA1430→SA1430抜き取り溝の変遷が確認され、I期官衙西辺の区画施設が溝跡（2時期）→材木列（1時期）の併せて3小期にわたることも明らかになってきた。特にこのSA1430材木列は抜き取り痕跡が材木列掘り方の底面まで及んでいる箇所もある



第28図 I期官衙南部遺構配図

り、そこでは材痕跡はまったく検出されていない。よって断面形がV字状の抜き取り溝のみがSD1394、SD1429溝跡を切って重複しているだけであったように観察される箇所がある（註3）。

今回行った第135次調査で発見された2時期の材木列は想定された配置関係や、SA1855とSA1910の規模、形態からSA1855がSD881とSA577、SA1910がSD882とSA578に対応するものと考えられる。SA1855・1910についても抜き取りの痕跡が確認されており、材木列掘り方の底面まで及んでいる箇所もある。特にSA1910については遺構の残存状況が悪く、材痕跡が極一部でしか検出されていない。このことは西辺を調査した第99次調査と極めてよく似通っている。しかし、西辺の第99次調査では材木列に先行する溝跡は2時期確認されているが、東辺の第135次調査ではSA1910材木列に先行する溝跡（SD1915溝跡）が一時期のみ確認されている。また東辺と南辺の材木列についてもSA1380がSD882、SA578・1910に、SA272がSD881、SA577・1855にそれぞれ対応するかなどについても今後発掘調査によって再確認して行く必要があろう。

註1 仙台市文化財調査報告書第167集 年報13 平成3年度 P12 郡山遺跡（93次調査）

註2 仙台市文化財調査報告書第169集 郡山遺跡 XIII－平成4年度発掘調査概報－

註3 仙台市文化財調査報告書第178集 郡山遺跡 XIV－平成5年度発掘調査概報－



73 第135次調査区全景（西より）



74 第135次調査区全景（東より）



75 SA1855木材列（南より）



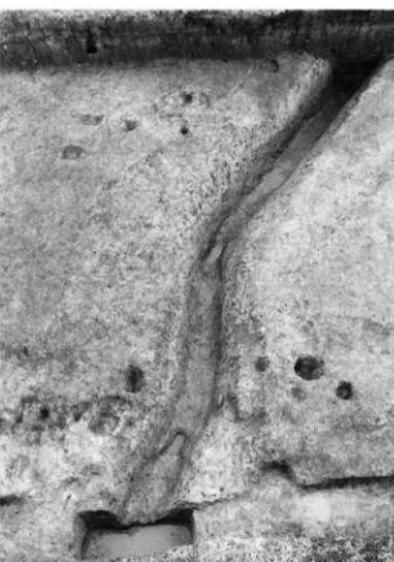
76 SA1855木材列断面（南より）



77 SA1855木材列遺物出土状況（E-441）



78 SA1910木材列・SD1915溝跡（北より）



80 SA1910木材列全景（南より）



79 SA1910・SD1915断面（北より）



81 SA材木列底面（柱痕跡）



82 SD1951・SD1957溝跡（南より）



83 SD1915溝跡出土置物（A-2）



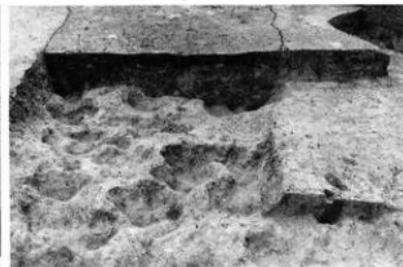
84 SD1952溝跡（南より）



85 調査区全景（西半）全景（南より）



86 SD1951溝跡（南より）



87 SD1957・SD1958溝跡断面（南より）



88 SD1356溝跡（西より）



89 SD1356溝跡（東より）



90



91



92



93



94



96



97

90 C-877 壕 SA1855抜き取り

91 C-878 壕 SA1855掘り方

92 C-883 壕 SA1855抜き取り

93 C-441 壹 SA1855掘り方

94 C-884 壕 SA1910

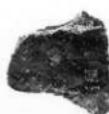
95 A-2 鉢 SA1910

96 C-879 壕 SD1915

97 C-880 壕 SD1915



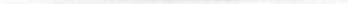
98



99



100



101



102



103



104



105



106



107



108

98 E-433 不明品

SD1915

104 D-73 坏

93次IV層上面

99 K-246 刺片

カクラン

105 D-74 坏

93次IV層

100 E-434 坏

表土

106 E-436 蓋

93次V層上面

101 E-435 坏

SA1855

107 E-437 高台付坏

93次V層上面

102 D-75 坏

93次IV層

108 E-440 蓋

93次V層上面

103 D-72 高台付坏

93次V層上面



109a 109b



110



111



112



113



114

109 C-882 壁 93次V層上面

110 E-444 壁 93次IV層

111 E-445 蓋 93次IV層

112 E-443 壁 93次IV層

113 E-442 不明品 93次V層

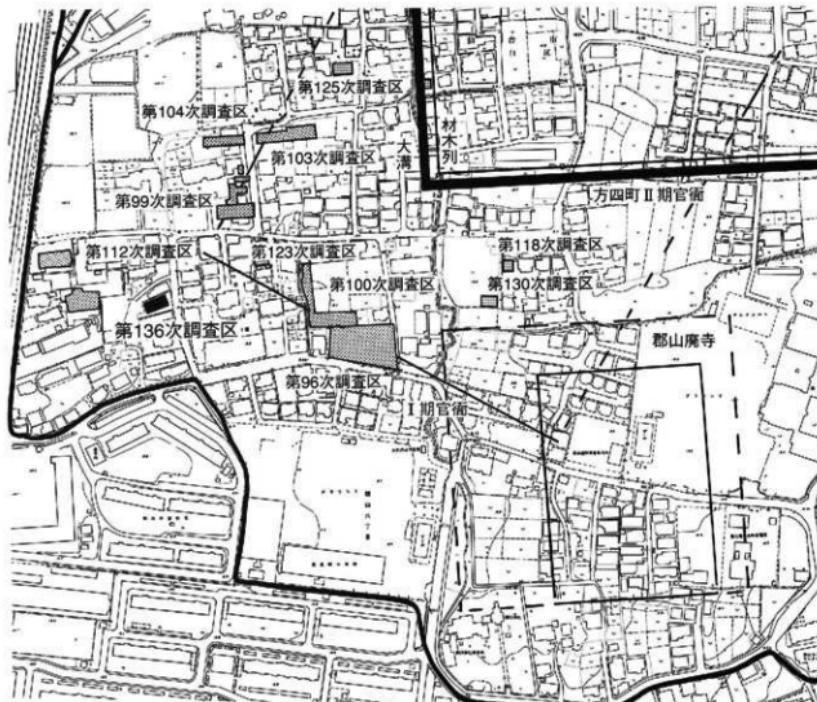
114 C-881 壁 SK1954、93次IV層

6. 第136次発掘調査

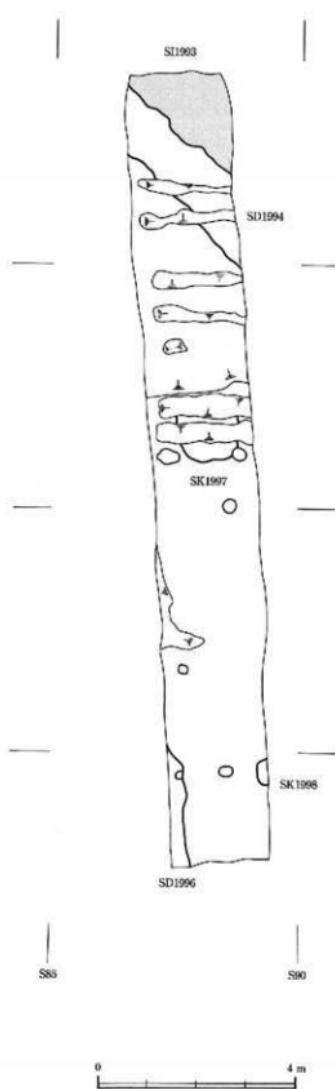
(1) 調査経過

第136次調査は、福島県河沼郡会津坂下町五反田1147-4-101号高橋利幸氏より、仙台市太白区郡山6丁目30-1、32-3において住宅新築に伴う発掘届が、平成12年8月8日付けで提出されたことにより実施した。住宅の基礎工事の深度が遺構の検出面より深く、遺構が損なわれると想定されたため発掘調査を実施するに至った。調査は住宅の建つ部分を対象に東西16m、南北2mの調査区を設定し、平成12年9月18日に表土排除を行なった。調査地は、I期官衙南辺より南に50m程離れた地点である。これまで周辺では、平成5年度の第99次調査でI期官衙の西辺となる溝跡や材木列が、平成8年度の第112次調査では官衙に隣接した小規模な掘立柱建物跡や竪穴住居跡が発見されている。また平成10年度の第123次調査ではII期官衙を構成すると考えられる掘立柱建物跡などが発見されている。

遺構の検出作業をしたところ、宅地になる以前の耕作による搅乱はあるものの、竪穴住居跡、溝跡、土坑などが検出された。よって施主ならびに施工責任者と協議した結果、基礎構造を変更し、遺構が損なわれないよう工事をすることとなった。調査は、遺構が保存されるため、確認に留めた。調査地は平成12年9月28日までに埋め戻し、整地作業を行なった。



第28図 第136次調査区位置図



第29図 第136次調査区平面図 (1/100)

(2) 発見遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は、竪穴住居跡1棟、溝跡2条、土坑2基、ピットなどである。遺構は基本層位第II層上面で検出されている。第I層は盛り土と畠である。現況より第II層上面までの深さは0.5mである。

SD1993竪穴住居跡 調査区の東端で検出され、堆積土の状況から竪穴住居跡の一部と判断した。西壁の方向はN-330°-Eである。

SD1994溝跡 上幅90cm以上で、方向はN-37°-Eである。
SD1993に切られている。

SD1996溝跡 調査区の北西端で検出され、堆積土の状況から溝跡の一部と判断した。南壁の方向はE-18°-Nである。

SK1997土坑 東西0.90m以上、南北1.25mのほぼ円形の土坑と推定される。

SK1998土坑 調査区の南西端で検出され、東西0.52m、南北0.20m以上の土坑である。

遺構の検出されたII層上面より、土師器、須恵器の小破片が出土している。

(3) まとめ

調査を実施した地点は、I期官衙南辺の外側にあたる。今回の調査で検出したSD1993竪穴住居跡は、検出したのみであるが、方向からはI期官衙期の遺構となる可能性がある。官衙の外側でこのような方向を示す竪穴住居跡は昭和58年度に実施した第38次調査でSI458・463竪穴住居跡が検出されたことがある。これらは2軒並んで検出された。また現在、区画整理事業による発掘調査が進められている西台畠跡でも、I期官衙と同時期と考えられる竪穴住居跡が発見されつつある(註1)。しかしI期官衙の東外側では、I期官衙に関連する遺構は発見されていない。I期官衙の周辺では遺構のあり方は違いがあるようである。今後注目していくべき課題である。

なおこの調査区に近接した第123次調査では、II期官衙を構成する掘立柱建物跡が発見され、廂附建物であったことから新たな官衙ブロックの存在について推定した。しかし今回の調査区からはII期官衙関連の遺構は発見されず、周辺での調査を積み重ねて検討して行きたい。



115 調査区全景（西より）



116 調査区全景（東より）



117 調査区西半（南より）



118 調査区東半（南より）

7. 第137次発掘調査

(1) 調査経過

第137次調査は仙台市教育委員会学校施設課より仙台市立郡山中学校地内において屋外トイレ建設に伴う発掘届が平成12年10月30日付けで提出された。周辺で南方官衙東地区とされる大規模な建物跡が発見され、関連する遺構が伸びている可能性があることと、学校校内という制約から事前に調査する必要があるため発掘調査を実施した。

調査区は屋外トイレの建つ部分を対象に東西3.8m、南北5mの調査区を設定し、平成12年10月30日に表土耕除を実施した。現況より深さ1.15m程で上面の遺構を、1.30mほどで下面の遺構を検出し、調査は11月16日に終了した。

(2) 発掘遺構・出土遺物

今回の調査で発見された遺構は土坑3基などである。これらの遺構は基本層位Ⅲ層上面で検出した。

SK1971土坑 南北1.40m、東西1.15mの不整形を呈する土坑で、深さは45cm程である。北壁は直立気味に立ちあがるが南壁は段を持つ、底面はほぼ平坦である。

遺物は第1層中より土師器小破片、須恵器小破片、瓦小破片、磁器片などが出土している。

SK1972土坑 調査区の南東隅で検出された遺構である。詳細は不明である。

遺物は渦文の施された瓦質土器香炉、磁器猪口、陶器小破片、瓦小破片などが出土している。

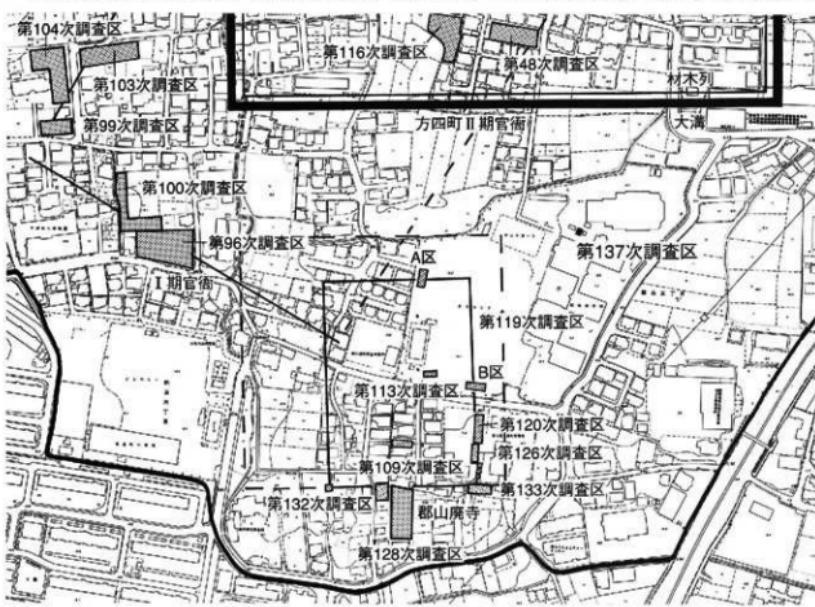
SK1977に切られる。

SK1977土坑 調査区の南東隅で検出された遺構である。詳細は不明である。

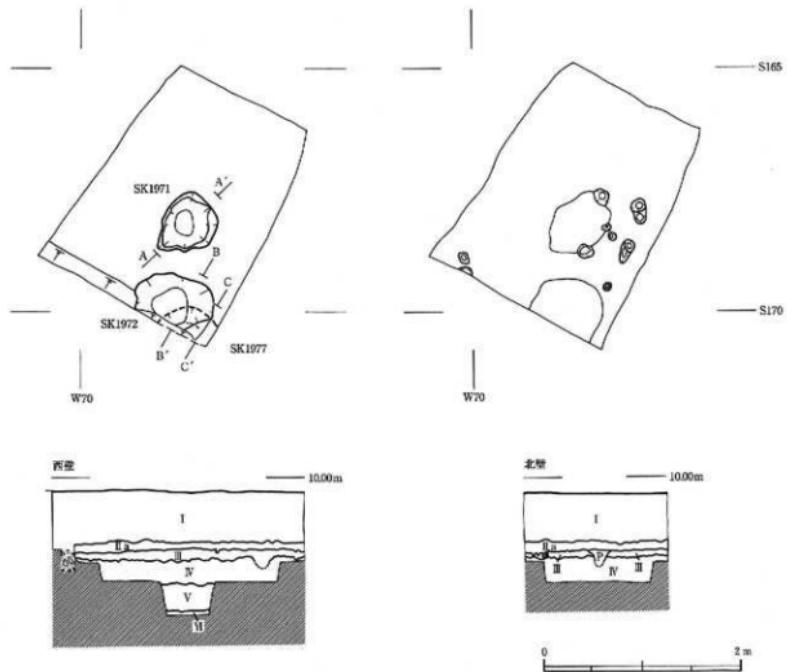
遺物は出土していない。

SK1972を切る。

この他に第IV層上面からはピット9基が検出され、そのうちピット1から土師器小破片1点が出土している。ま



第30図 第137次調査区位置図



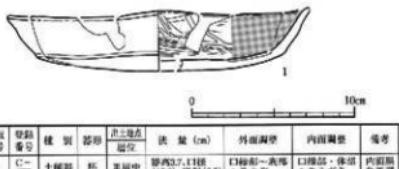
遺構名	層位	土色	土性	編号
基	I	10YR2/1 黄色	粘土	
本	IIa	10YR3/1 黑褐色	粘土	
層	III	ZSYR4/2 灰黑色など	粘土	ダイライ・歯状炭化物を斑状に含む箇所がある
位	V	ZSY6/2 灰黄色	粘土	
	VI	10YR4/1 暗灰黑色	粘土	
P	II	10YR2/1 黄色	粘土	

第32図 第137次調査区平・断面図(1/100)

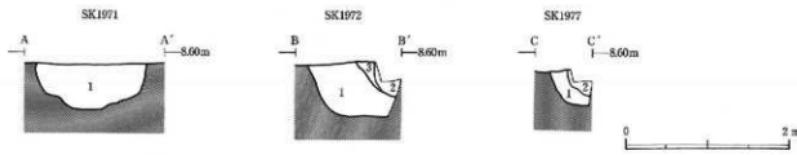
た、遺構外ではあるが、Ⅲ層中より内面黒色処理された底面が平底風の土師器C-875号(第33図1)が出土している。

(3) まとめ

第137次調査区は昭和61年から平成3年にかけて郡山中学校校舎新築に伴う第65次調査として調査を実施したN区に隣接している。第65次調査では方四町Ⅱ期官衙の南外側に位置しているながら、掘立柱建物跡21棟が発見されている。これらの建物跡は調査区南部で官人の居宅と考えられる「寺院東方建物群」、北部で南北2間、東西10間の長大な建物跡を含む「南方官衙東地区」としてとらえている。今回発見された遺構は出土遺物から官衙に伴



第33図 第137次調査区出土遺物



遺構名	層位	土色	土性	備考
SK1971	1	10YR4/3 床	粘土	グライ化強い
SK1972	1	10YR2/1 喬冠灰	粘土	
SK1977	1	10YR4/6 海など	粘土	褐色粘土、黒褐色粘土が混じる
	2	10YR4/1 床	粘土	グライ層(1層がグライ化したものと考える)

第34図 第137次調査区遺構断面図 (1/60)

う時期の遺構ではないと考えられる。調査範囲が3.8m×5mと小規模であったため周辺に関連する遺構が配置されていることも考えられるが調査区内ではその痕跡を見出すことはできなかった。今後も周辺での調査を重ね「寺院東方建物群」「南方官衙東地区」の様相をより明らかにしていきたい。



119 C-875 坪 Ⅲ層中



120 第137次調査区全景 (南より)

8. 総 括

今年度は第5次5ヵ年計画の第1年次目にあたり、7世紀末から8世紀初めにかけての方四町Ⅱ期官衙と同時期の郡山廃寺の範囲を明らかにすることを主目的として発掘調査を実施した。また、Ⅰ期官衙東辺の詳細について把握するために、平成3年度に宅地造成に伴い行われた第93次調査の中央部分に改めて調査区を設定し、発掘調査を実施した。さらに、個人住宅の建て替えのうち、基礎構造が深く遺構を損なうような住宅建設については「仙台平野の遺跡群」として小規模な調査を実施した。

1. Ⅱ期官衙の調査

(1) 方四町Ⅱ期官衙の調査について

今年度の調査では第134次調査で、方四町Ⅱ期官衙中枢部の東に隣接した箇所を発掘調査した。その結果、掘立柱建物跡3棟を発見したが、官衙の時期の建物跡ではないと考えられた。よってこの地点は方四町Ⅱ期官衙の時期には遺構のない空闊地であったと見られる。この様相はこれまで想定していた官衙中枢部のあり方を裏付けるものである（註1）。これにより方四町Ⅱ期官衙内部の中央や南寄りに、建物列によって挟まれた東西が棟通りで105～108m、内側で102～104m、さらに南北では173mの中軸部が想定される。その内部には正殿や石組池、SB1555などの主要な遺構が配置されていたと考えられる。さらにその外側には建物などが建てられない空闊地が存在している。

これらの中軸部の建物跡は正殿と外郭南門の中心を結んだ中軸線（註1）と、方四町Ⅱ期官衙の外郭線の二等分線による中軸線（註2）とでは、建物跡の対称性は中軸線（註2）のほうが求めやすい。ただし建物跡は、西列では北半が、東列では南半が調査できないため厳密な対称性については検証できない状況にある。またこれらの建物についても各々が果たしていた機能については、正殿や石組池、石敷きのようなきわめて儀礼的な空間と想定される部分とそれ以外の建物との違いなどについて検討していくかねばならない点がある。

これらは方四町Ⅱ期官衙の創建期であるⅡ-A期の状況である。これが後のⅡ-B期になると建物の建てられる方向がやや西に振れはじめ、Ⅱ-A期の時期に空いていた部分に建物が立つようになる（註2）。これは官衙の機能の変化を示す可能性があり、今後の調査の中で検討していく。

(2) 郡山廃寺について

郡山廃寺は今年度の第132次・第133次調査により、廃寺の南西・南東コーナー付近では南辺材木列はさらに西、東方向に延びており、L字型を呈さないようである（註3）。これまでの調査から東西120～125m、南辺167mの寺域が材木列で囲まれていると考えられていたが、第133次調査では南辺と東辺の間に90～170cmの範囲で空いていることが新たに確認された。

のことからこれまで廃寺外郭東辺と考えられていた材木列は南辺付近では寺院の外部区画とはならず、内部区画として機能している可能性が出てきた。伽藍配置が郡山廃寺・多賀城廃寺などとの類似性が指摘されている大宰府觀世音寺跡（註4）では室町時代に作成された「大宰府觀世音寺繪圖」の中軸伽藍の東西に見られる「戒壇院」、「菩薩院」と記された別院が存在している。しかし、当遺跡の昭和62年に行われた第70次調査では施設南西部外側に付属する施設を構成するような遺構は発見されていない。また東西にさらに延長する南辺についても、東側の延長部分については南辺と東辺が交わると考えられていた地点から東へ10.8mまで延びていたことは確認しているが、方四町Ⅱ期官衙南門から南下する大路のような道路の存在を想定した場合は、それを横断するような南辺の長さではないであろう。

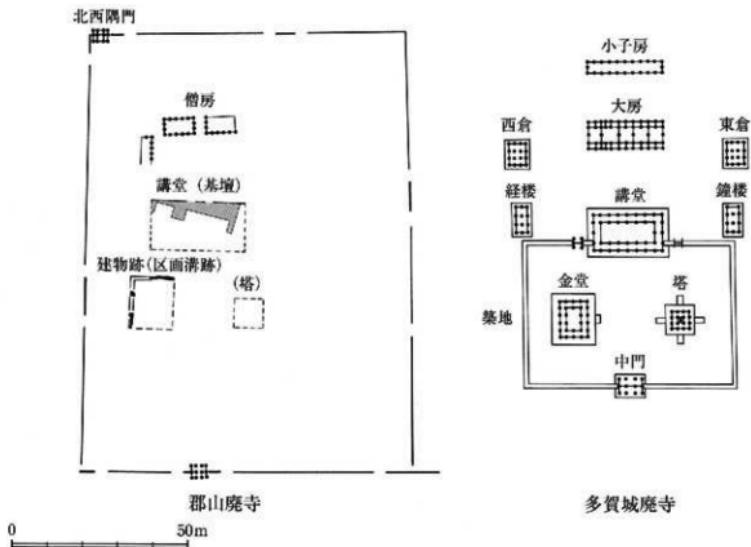
郡山廃寺南東部周辺では住宅地が密集しており、今後まとまった面積を調査することが難しいが、小規模な調査を繰り返しながら様相の把握に努めていきたい。

(a) 出土した遺物について

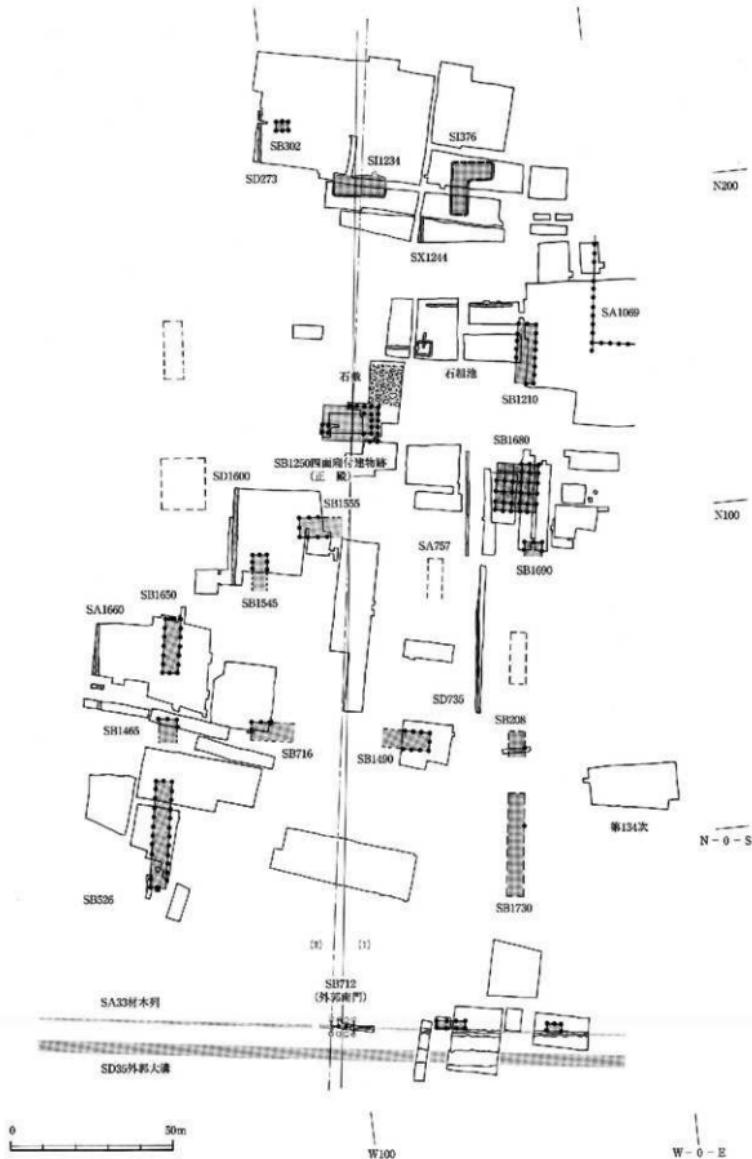
今年度報告した遺物のなかで、「I 5. 第135次調査」で以前調査した第93次調査区の出土遺物を掲載した。そのうち土師器C-882坏(第27図13、写真109)は、内面黒色処理されず口縁端部がやや丸まり、内面は沈線状に凹むものである。また胎土が赤褐色気味で、断面でやや薄い層状の割れ方が観察される。このような特徴は、本遺跡の第24次調査SI261から出土した畿内系暗文土器C-186とよく特徴が似ている(註5)。内面の暗文は残っていないが東北地方で作成された土器とは特徴を大きく異にしている。

2. I期官衙の調査

第135次調査で発見されたSA1855、SA1910材木列は双方とも抜き取りを受けており、抜き取りが材木列掘り方底面まで及んでいる箇所では、材痕跡はまったく検出されていない。またこれらの材木列の北延長線上で、昭和59年度に行われた第48次調査で発見されていたSA577とSA578についても同様に抜き取りが確認されている(註6)。しかしこれらの材木列の南延長線上で行われた昭和61年度の第63次調査では材木列は発見されずに、溝跡が発見されている。第63次調査で検出されたSD881では「溝が半ば埋まった時点で、溝さらいを行い、さらに深く掘り直し作業を行った」(註7)としていたが、平成5年度の再検討により溝跡→(材木列)→抜き取り溝と変遷している可能性を指摘してきた。また、SD881と規模や方向が同様なSD882についても「掘り直し作業を行った形跡は認められない」(註8)と考えたが、第99次調査での様相から材木列掘り方の底面まで抜き取りが及んでいるため材木列の確認ができなかったと考えられるようになった。第63次調査は遺跡範囲確認調査であり、SD881・882は底面まで発掘したのは一部のみであった。



第35図 郡山廃寺と多賀城廃寺

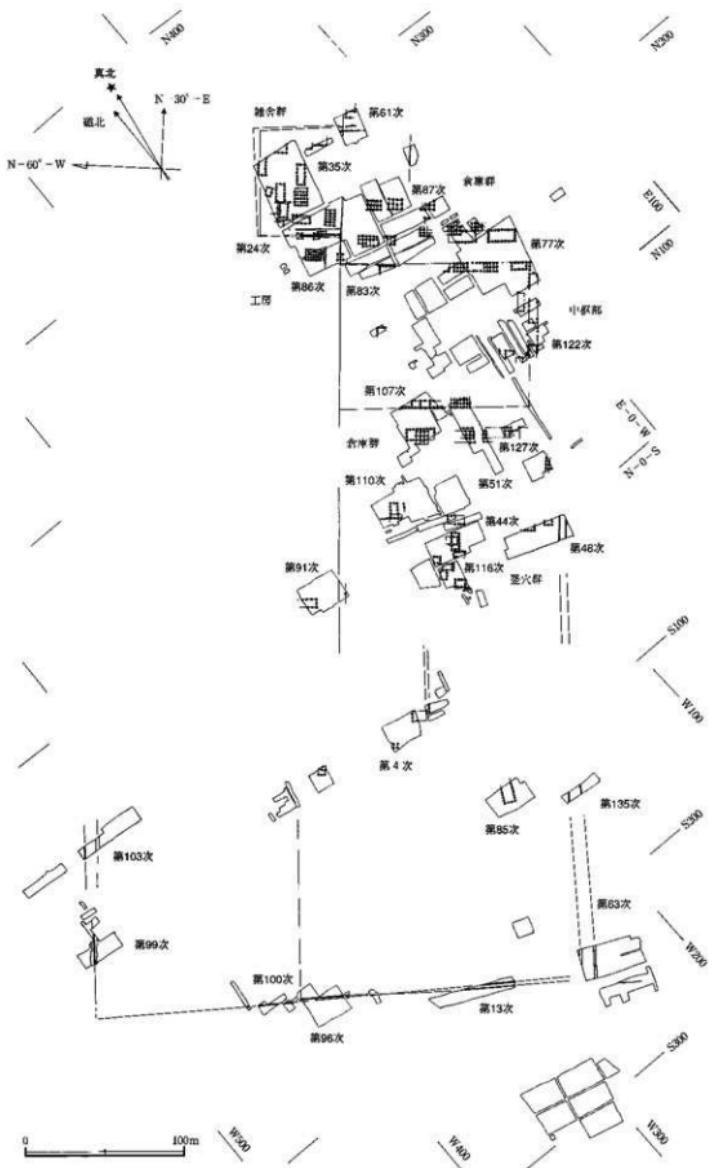


第36図 II期宮衙中枢部主要遺構配置図

今年度の第135次調査で第63次調査のSD881・882の北への延長線上から材木列が発見されたことによって、SD881・882についても本来は材木列であったが抜き取りを深く受けたことによって、材痕跡が検出されなかつ可能性がさらに強まつたと言えよう。

今年度の調査によりⅠ期官衙東辺を区画する施設が材木列であり、これらの材木列は抜き取りを受けており、抜き取りが材木列掘り方底面まで及んでいる箇所では材痕跡はまったく検出されていない様相が再確認された。しかし区画施設の変遷がⅠ期官衙全体を見た場合にどのような様相になっているのかについては課題を残している。今回の第135次調査でもⅠ期官衙の段階に相当すると考えられる溝跡や聚穴住店が発見されていることから、Ⅰ期官衙の区画施設については今後とも周辺での調査を積み重ね、Ⅰ期官衙の区画と区画施設内外の遺構の様相を明らかにしていきたい。

- 註1 仙台市文化財調査報告書第227集 「郡山遺跡XIII－平成9年度発掘調査概報－」 P30 V 1 1998
仙台市文化財調査報告書第215集 「郡山遺跡XVII－平成8年度発掘調査概報－」 P35 VII 1 1997
- 註2 仙台市文化財調査報告書第210集 「郡山遺跡XVI－平成7年度発掘調査概報－」 P41 VI 1(2)
1996
仙台市文化財調査報告書第194集 「郡山遺跡XV－平成6年度発掘調査概報－」 P49 VII 2 1995
- 註3 本書P15 註1と同じ
- 註4 仙台市史編さん委員会「仙台市史 通史編2 古代中世」2000
今泉降雄氏は「郡山廃寺の伽藍配置が多賀城廃寺、筑紫觀世音寺と同じであるということを前提に考えると、郡山廃寺は多賀城廃寺の前身の国府の寺…」としている。
- 註5 仙台市文化財調査報告書第46集 「郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報－」 P53 IV 4 1983
- 註6 仙台市文化財調査報告書第74集 「郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報－」 1985
- 註7 仙台市文化財調査報告書第124集 「郡山遺跡IV－昭和63年度発掘調査概報－」 1989
- 註8 しかし詳細な点では、Ⅰ期官衙東辺上ならびに西辺上で材木列に先行する溝跡が確認されている。東辺では確認された溝跡がⅠ期官衙南部を区画する1小期目の材木列に先行する溝跡となつてゐるのに対して、西辺上では2小期目に相当する。あり方についてはⅠ期官衙全体の変遷を踏まえて検討が必要である。



第37図 I期官衙全体図

調査成果の普及と関連活動

1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主 催
2000. 6. 5	展示室見学	長島	沖野中学校ふれあい学級
6. 12	遺物・第133次調査区ビデオ撮影	長島・松本	横浜歴史博物館
6. 20	展示室見学 体験学習事前指導	長島	東長町小学校社会学級
6. 23	発掘体験・展示室見学	松本	郡山中学校1年総合学習
6. 24	発掘現場・展示室見学	木村	宮城学院女子大学
10. 30~31	展示室・遺物・発掘現場見学	長島	東長町小学校6年
11. 14	発掘体験・展示室見学	松本	宮城野中学校1年
11. 16	展示室見学	長島	仙台市太白区中央市民センター
12. 14	総合学習指導	松本	東長町小学校3年
12. 16	宮城県遺跡調査成果発表会	長島・松本	宮城県考古学会 大和町教育委員会
12. 20	展示室・ピロティ見学	長島・松本	東長町小学校3年
2001. 2. 24~25	第27回古代城柵官衙遺跡検討会	木村・長島・松本	古代城柵官衙遺跡検討会

2. 調査指導委員会の開催

第29回 郡山遺跡調査指導委員会 平成13年3月2日青葉区役所4F第2会議室

○平成12年度の調査成果について

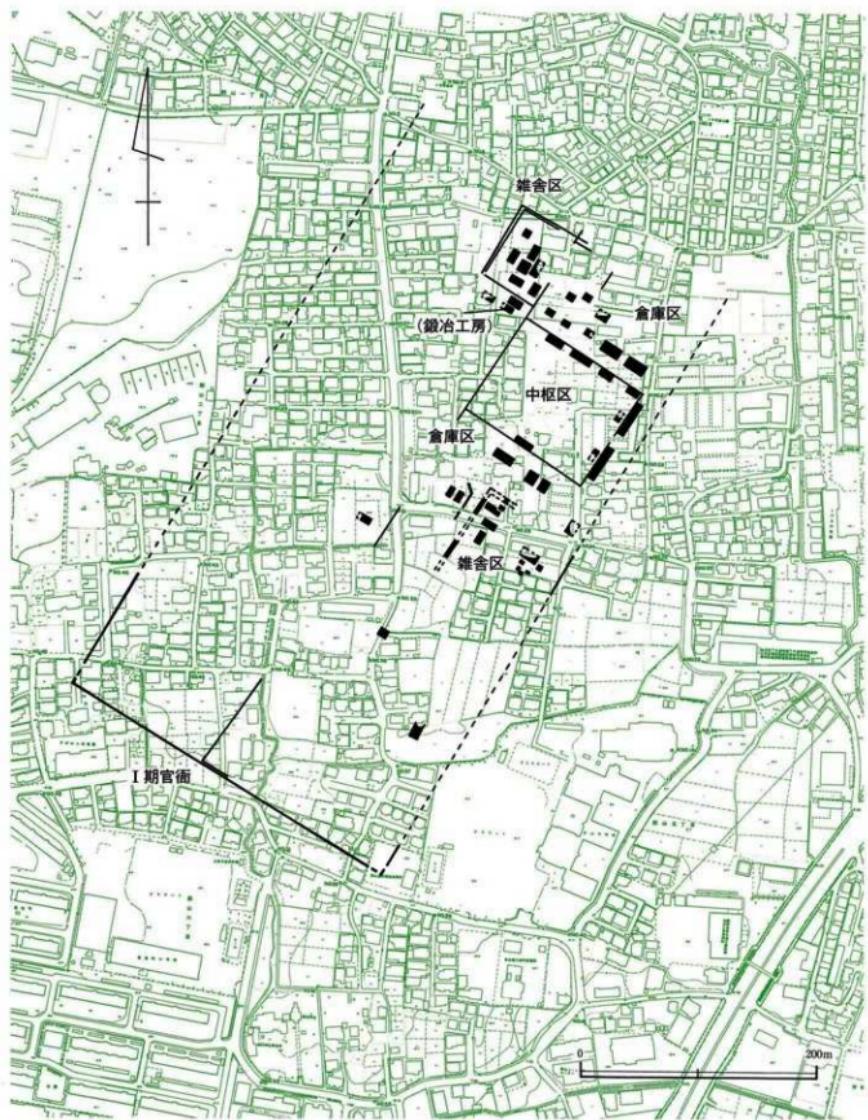
○平成13年度の調査計画について

3. 資料の貸し出し・展示

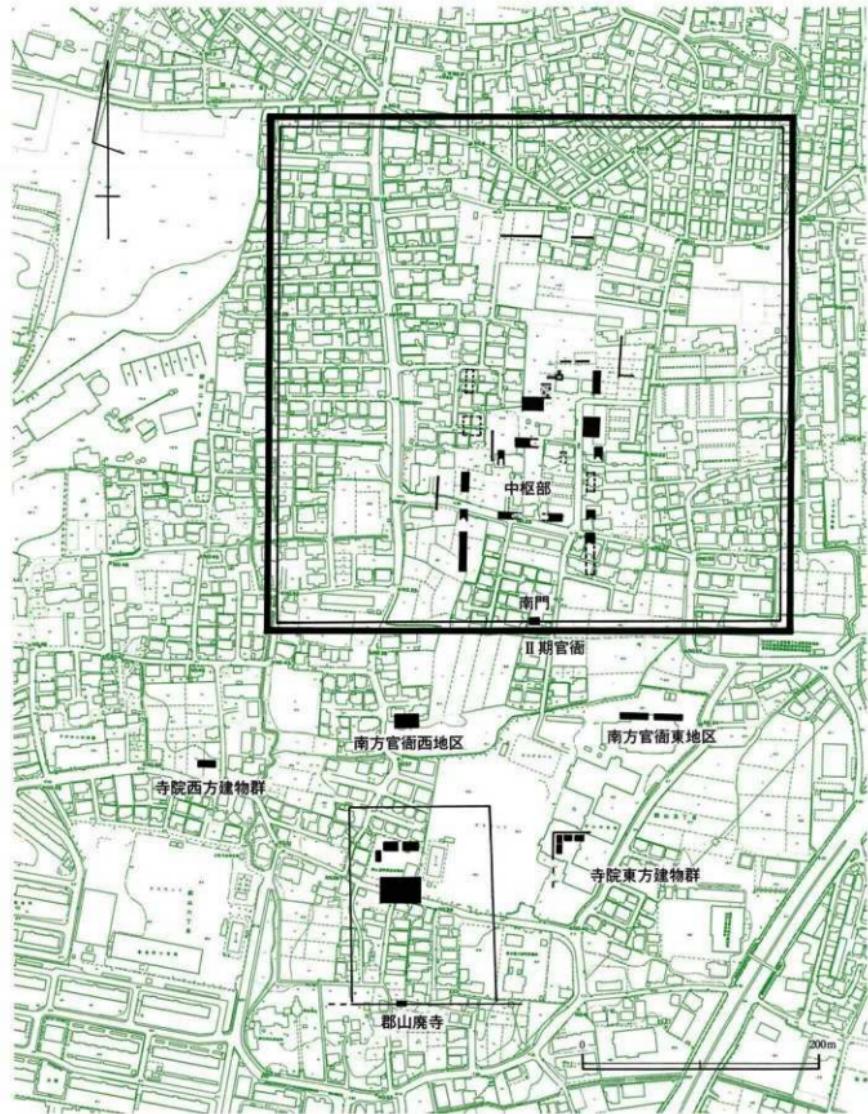
東北歴史博物館	常設展「古代」城柵とエミシ
仙台市博物館	常設展「原始・古代・中世」
多賀城市埋蔵文化財調査センター	企画展「漆紙文書に見る古代東北」
宮城学院女子大学	博物館実習
郡山中学校	文化祭
将監西小学校	3年生総合学習「仙台の漢字の始まり」

4. 展示室の利用者

平成12年4月~平成13年3月 445名



第38図 I期官衙遺構配置図



第39図 II期官衙遺構配置図

郡山遺跡 SB1930建物跡出土のテフラ分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

仙台市域とその周辺には、十和田など東北地方に分布する火山のはか、中国地方や九州地方に分布する火山などから噴出したテフラ（tephra、火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、それらとの関係を求めるこことにより、地層の堆積年代や土壤の形成年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。そこで、火山灰が認められたとされる仙台市郡山遺跡においても、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みることになった。

2. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

屈折率測定の対象となった試料は、発掘調査担当者により採取された試料①-1、①-2 (SB1930建物跡柱穴)、② (郡山遺跡第65次調査第Ⅲ層 宮衙より上層の水田跡)、③ (仙台市洞ノ口遺跡第3次調査第V層) の4点の試料である。測定は、温度・定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1993) による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表1に示す。試料①-1には、白色の軽石型火山ガラス (最大径0.6mm) が多く含まれている。火山ガラス (n) の屈折率は、1.503-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石が少量含まれている。斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.706-1.708である。

試料①-2にも、白色の軽石型火山ガラス (最大径0.6mm) が多く含まれている。火山ガラス (n) の屈折率は、1.503-1.508である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石が少量含まれている。量がとくに少ないとために正確なレーンジを求めるることは難しいが、斜方輝 (γ) の屈折率は1.707±である。

試料②には、無色透明や白色の軽石型火山ガラス (最大径0.6mm) が多く含まれている。火山ガラス (n) の屈折率は、1.503-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石が少量含まれている。量がとくに少ないとために正確なレーンジを求めるることは難しいが、斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.706-1.707である。

試料③には、白色の軽石型火山ガラス (最大径0.4mm) が多く含まれている。火山ガラス (n) の屈折率は、1.503-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や單斜輝石が少量含まれている。斜方輝石 (γ) の屈折率は、1.706-1.708である。

3. 考察

分析の対象となった試料の間では、火山ガラスの最大粒径や色調などにわずかな違いが認められるものの、有意な違いは認めることができなかった。いずれのテフラも、火山ガラスの形態や色調、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから総合的に判断すると、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田a火山灰 (To-a, 町田ほか, 1981) に由来する可能性がもっとも高いと考えられる。なお、これらの試料に含まれる火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ (町田・新井, 1992) に記載されている値より若干高い。このような値の若干の違いは、岩手県南部以南のTo-aによく認められる (古環境研究所, 未公表)。この違いは、カタログに記載された試料の採取地点が給源火山に近く標準試料に含まれる火山ガラスが分厚く、またTo-aの噴出年代が新しくために、十分水和が進んでいないことに起因すると考えられる (新井房夫群馬大学名誉教授談話)。

試料に添付されたコメントによれば、試料①-1と試料①-2については、試料②や試料③の降灰より先立つテフラの可能性があるとのこと。もしそうであれば、試料①-1と試料①-2については、比較的似たような特徴をもつ約1.2~1.3万年前に十和田火山から噴出した十和田八戸テフラ (To-HP, Hayakawa, 1985, 早川, 1983a) や、約5,000年前に沼沢火山から噴出した沼沢1テフラ (Nm-1, 只見川第四紀研究グループ, 1966a, 1966b) に由来するテフラ粒子が二次的に混入している可能性を考慮する必要があるのかも知れない。しかし今回の分析対象となった試料中には、これらのテフラに含まれる角閃石は検出されていない。

いずれにしても、テフラを過去の時空指標として利用する火山灰編年学は、テフラーの一次堆積層を利用するのが基本である。今回は実際に現地において、土層断面を観察する機会に恵まれなかった。テフラの一次堆積層の認定には土層断面での観察が不可欠であることから、今後現地での土層観察の設定が望まれる。

4.まとめ

仙台市郡山遺跡で採取されたテフラ試料について屈折率測定を行った。その結果、いずれの試料からも十和田a火山灰 (To-a, 915年) に由来する可能性が非常に高いテフラ粒子が多く検出された。

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジ の基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254~269.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」, p.138~149.
- 早川山紀夫 (1983) 火山豆石として降下堆積した十和田火山八戸火山灰. 火山, 28, p.25~40.
- Hayakawa,Y. (1985) Pyroclastic geology of Towada volcano. Bull. Earthq. Res. Inst. Univ. Tokyo, 60,p.507~592.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 (1981) 日本海を渡ってきたテフラ. 科学, 51, p.562~569.
- 只見川第四紀研究グループ (1966a) 福島県野沢盆地の浮石質砂層の基底部より産出した木材の¹⁴C年代—日本第四紀層の¹⁴C年代XXVI-. 地球科学, 82, p.8~9.
- 只見川第四紀研究グループ (1966b) 只見川・阿賀野川流域の第四系の編年—とくに沼沢浮石層の層位学的諸問題について—. 第四紀, 8, p.76~79.

表1 郡山遺跡における屈折率測定結果

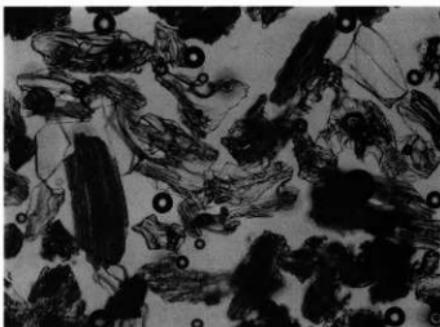
試料	火山ガラス					重鉱物	
	量	色調	形態	最大径	屈折率 (n)	組成	斜方輝石 (γ)
①-1	+++	白	pm	0.6	1.503~1.507	(opx, cpx)	1.706~1.708
①-2	+++	白	pm	0.6	1.503~1.508	(opx, cpx)	1.707±
②	+++	無色, 白	pm	0.6	1.503~1.507	(opx, cpx)	1.706~1.707
③	+++	白	pm	0.4	1.503~1.507	(opx, cpx)	1.706~1.708

++++ : 特に多い, +++ : 多い, ++ : 中程度, + : 少ない, - : 認められない, pm : 輕石型.

最大径の単位: mm. 屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法 (新井, 1972, 1933) による.

opx : 斜方輝石, cpx : 単斜輝石. () は量が少ないことを示す.

①-1 郡山 To-a



0.1mm

② 郡山 To-a



0.1mm

③ 洞ノ口 To-a



0.1mm

II 仙台平野の遺跡群

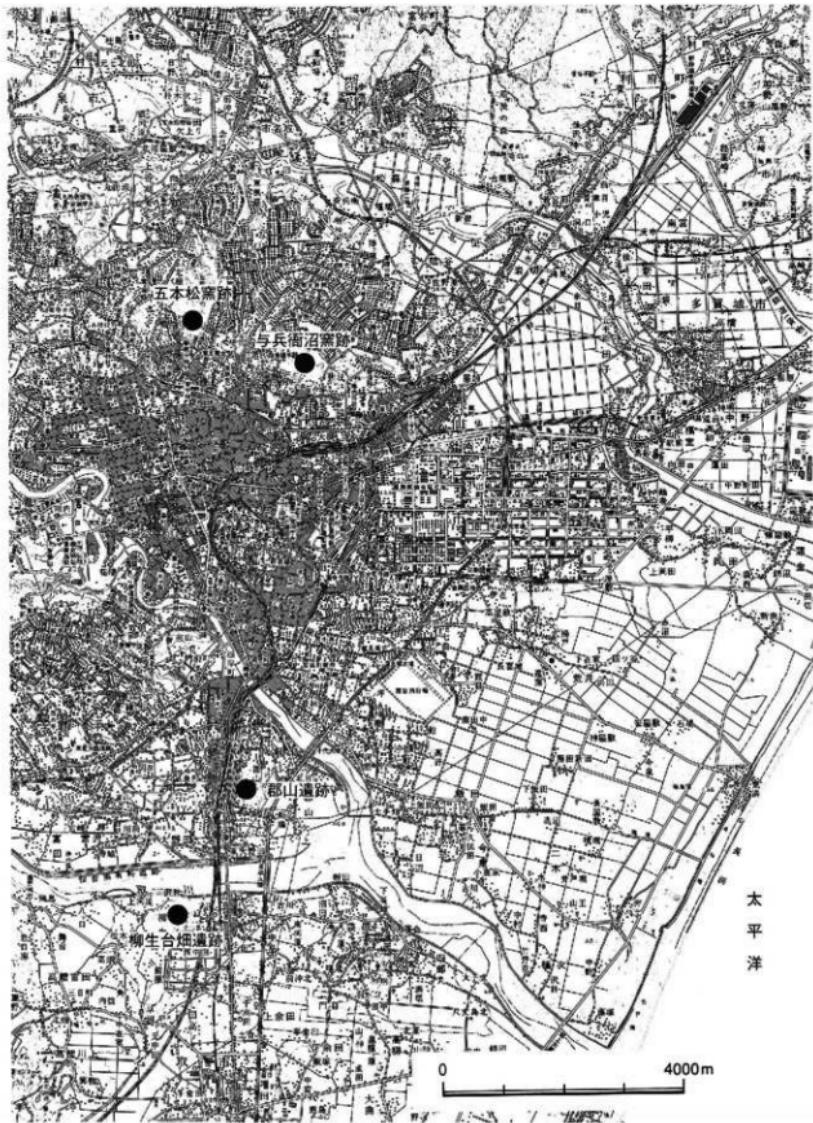
1. 調査計画と実績

仙台市は明治22年に市政を施行して以来100年目にあたる平成元年に、全国11番目の政令指定都市に移行した。また市営地下鉄の開業やそれにアクセスする道路網の整備によって、市街地の拡大や新たな商業地域を形成しつつある。このような中で仙台市内の遺跡が、現況のまま継承されるとは考えにくく、事前に重要な遺跡の範囲や性格を究明するための発掘調査や個人住宅の建築などの小規模な開発に対応した発掘調査などを積み重ねて行くことが必要であると考えている。これをふまえて当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受け、「仙台平野の遺跡群」による発掘調査を実施してきた。これまで郡山遺跡をはじめ、燕沢遺跡、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、仙台城巽門跡、長町駅東遺跡などで発掘調査を実施し、大きな成果を上げている。

今年度は昨年度の実績から、仙台市内の個人住宅に対応した発掘調査を4・5件予定していた。しかし今年度中に実施した発掘調査は、第1表にあるように個人住宅に対応した発掘調査は1件のみで、その他は今後の遺跡保護のために必要と考えられた遺跡での発掘調査となった。

調査地	所在地	申請者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
五本松空跡	青葉区白原森林公園703-10	仙台市教育委員会 学校教育部 学校施設課長	学校用地拡張に伴う造成工事	165m ²	165m ²	平成12年8月22日
柳生台畠造跡	太白区柳生台57番地新太郎	太白区柳生台57番地新太郎	老人保健施設建築	4,410m ²	198m ²	平成12年12月11・12日
与兵衛沼空跡	青葉区小松島新堤	仙台市長 藤井 駿	道路建設	12m ²	12m ²	平成12年12月4日
郡山遺跡	太白区郡山6丁目30-1、32-3	福島県河沼都会津坂下町五反田1147-4-101号 高橋利幸	個人住宅建築	79m ²	30m ²	平成12年9月18日～9月28日
	太白区郡山5丁目10-3	仙台市教育委員会 教育長 小松先生	学校施設建築	22m ²	20m ²	平成12年10月30日～11月18日

第1表 調査実績表



第40図 遺跡位置図

2. 五本松窯跡

(1) 位置と環境

仙台市街地の北部、東西に連なる台原・小田原丘陵は古代の窯跡群が数多く存在することで知られているが、その西部にこの窯跡は位置している。当窯跡はA～H地点で窯跡の存在が確認ないしは予想されている。台原森林公園の南端一帯にあたり、丘陵の南及び東斜面である。

森林公園の東側を画する沢が深く北東方向に刻まれているが、今回はその沢頭になるF地点の調査である。本来このF地点はもっと南東側が主体となるところであるが、以前に宅地化されて、北西部の残地に当たる。

これまでD、G地点で3回の本調査が行われ、地下式・半地下式の須恵器と瓦を焼成した登窯が発見されている。須恵器専用窯のものは平安時代前半に位置づけられ、瓦窯は多賀城Ⅳ期に該当するものである。

(2) 調査に至る経過

財務局の敷地を学校用地として買取り造成することになり、平成11年度から工事主体である仙台市教育局の学校施設課と協議してきたところである。12年度に確認調査する環境が整備されたのに合わせて現状把握を兼ねた分布調査を実施したが、焼土・炭・瓦等の散布が見られないこと、急斜面が多いこと、また以前に切土された部分もあることより、工事範囲内に窯跡の存在の可能性は少ないとの認識を持った。

その見通しを確認するために、対象地のうち一番傾斜が緩い場所をねらって調査区を設け確認調査を実施することにした。

(3) 調査の概要

(第1地点)

対象地の北西箇所であり、既に切土されているのかどうか不明であったので重機で掘削したところ、切土されていることが判明した。

調査した面積は約50m²である。

(第2地点)

対象地の北端部の東側斜面で、浅い沢地形とみられたところである。重機によりこの沢地形の部分を全体的に削ったが、遺構の発見のみならず、遺物片や焼土・炭等の検出もなかった。

調査面積は約115m²である。

(4) まとめ

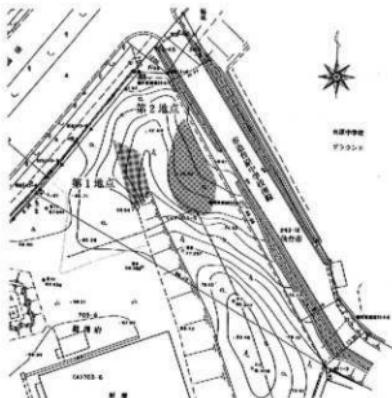
表土の厚さは10cm位で、地山上層は黄褐色の山砂、下層はバミスを含む、脆い砂岩である。

今まで発掘調査した五本松窯跡の地点は、当地点から見て深い沢を挟んだ西側の東斜面であり、地山が粘土質シルトなどで、窯の構築に耐えられる粘性土壤であった。この点が立地土壤として強調される相違点である。

今回の確認調査で遺構・遺物も発見されなかったことから、造成工事に伴う事前の発掘調査は必要ないと判断された。



第41図 五本松窓跡 (1/10,000)



第42図 調査区位置図 (1/1,250)



調査地近景
(北より)



第1地点
(南より)

3. 柳生台畠遺跡

(1) 位置と環境

本遺跡は仙台市太白区柳生台畠に所存し、JR南仙台駅より西へ約1km、名取川の南岸に位置する。遺跡の規模は東西約400m、南北約320mで、標高は10~20mである。周辺は名取川の旧河道により形成された自然堤防と低湿地が広がっている。調査地点は遺跡の北東隣接地で、屋敷林の杉林及び竹藪のあった場所である。遺跡は古墳時代から平安時代にかけての散布地として登録されていたが、近年遺跡の南端部で小学校建設に伴い発掘調査が行われ、中世の堀跡や墓坑などの遺構が多数発見され、中世の屋敷跡や墓域の存在が明らかになっている。

(2) 調査に至る経過

平成12年10月10日付けで、山口新太郎氏から、柳生台畠遺跡の隣接地に老人保健施設を建設する件で、協議書が提出された。隣接地ではあるが杭打ちを伴う施設であることから、遺跡範囲外における遺構の有無を判断するため、まず試掘調査を行いその後の対応を検討することで協議が成立した。試掘調査は平成12年12月11・12日に実施した。

(3) 調査の概要

現在の住宅を避け、建物予定地内に南北のトレンチを3本設定した。基本層序は、1層が約20cmの表土、2層が黄褐色砂質シルトで、3層が砂疊層である。

第1トレンチ (3×24m)

2層が存在したのは第1トレンチのみである。その第2層上面で精査したが、木の根の擾乱以外遺構遺物は発見されなかった。

第2トレンチ (3×24m)

表土直下は大部分が3層の砂疊層となる。遺構遺物は発見されなかった。

第3トレンチ (3×18m)

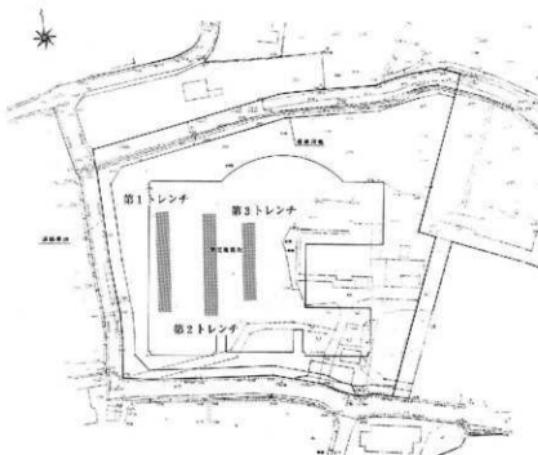
北半には、プラスチックや板ガラス、瓦などが混じる擾乱が多く、南半は砂疊層で、遺構遺物は発見されなかつた。

(4) まとめ

調査の結果、遺構遺物は発見されなかったことから、本調査は不要と判断された。遺跡の範囲が東までのびていないことが確認された。



第43図 柳生台畠遺跡 (1/10,000)



第44図 調査区位置図 (1/12,000)



調査近景（西より）



第1トレンチ（南より）



第2トレンチ（北より）



第3トレンチ（南より）

4. 与兵衛沼窯跡

(1) 位置と環境

仙台市街地の北部、東西に連なる台原・小田原丘陵は古代の窯跡群が数多く存在することで知られているが、その一つに与兵衛沼窯跡群がある。蟹沢という沢をせき止めて農業用水としていた堤（沼）で、その北岸にブロック状に確認されている。当窯跡群は本調査されたことはないが、やはりこの蟹沢の北岸に面している折江遺跡（窯跡）、神明社窯跡では本調査も行われている。

今回の対象部分は沢の西端部（最奥部）に該当する個所である。

(2) 調査に至る経過

都市計画街路川内南小泉線からの取り付け道路建設に伴い遺跡との関わりがあり、平成9年度から工事主体である仙台市建設局道路部街路課第2係と協議してきたところである。昨年・11年度から具体化してきたのに合わせて、現状把握を兼ねた分布調査を3回実施した（担当：新城、篠原、吉岡）。その結果、沢底からの急斜面であり、その平面上の距離（幅）が短く、既に造成されているところもあり、焼土・炭・瓦等の散布も見られなかったことより、工事範囲内に窯跡の存在の可能性は少ないとの認識を持った。

その見通しを確認するために、今回、沢底からの幅が確保できる地点に調査区を設け確認調査を実施することにした。

(3) 調査の概要

（第1調査区 6.3m × 0.8m = 5.04m²）

東斜面に設定した。腐植土が約10cmあり、その下が黄褐色シルトの地山となっているところと、約20cmの灰黃褐色シルトを掘削して地山となるところがある。遺構の発見なく、瓦等の遺物、焼土、灰、炭の混入も見られない。

（第2調査区 2.6m × 0.5m = 1.3m²）

東斜面に設定した。腐植土及び堆積土が15～30cmで地山（黄褐色シルト）に達する。遺構、遺物、焼土等の発見、出土はない。

（第3調査区 2.8m × 0.6m = 1.68m²）

ほぼ東向きの緩斜面を狙って設定した。約10cmの腐植土を退けるように削ると淡黄色シルトの地山である。発見遺構、出土遺物等はなかった。

（第4調査区 2.3m × 0.6m = 1.38m²）

南斜面に設定した。腐植土、人為・自然堆積土が20～30cmある。碎石などの混入する人為堆積土中に布目瓦の小破片1点を発見した。地山は淡黄色シルトで、その他遺構等の発見、検出はなかった。

（第5調査区 2.6m × 0.6m = 1.56m²）

第1、2調査区の向側の西側斜面に設定した。淡黄色シルトの地山までは約30cmの深さがある。遺構、遺物等の検出はなかった。

（第6調査区 1.8m × 0.8m = 1.44m²）

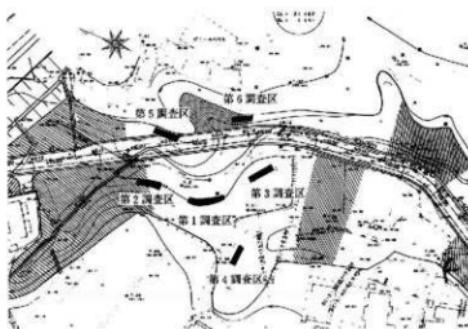
第3調査区の向側の西側斜面に設定した。ちょうど小沢が流れ込んでいる地点に近く、腐植土、斜面上部からの崩落土のほか、沢水により運ばれ堆積したと考えられるシルト質砂及び腐植土の互層が60cm以上見られ、水も湧く状況であった。この地点では沢底までこの堆積が続くものと考えられる。堆積土中には、遺物、焼土・灰・炭など、窯跡が付近に存在していることを予想させるものは混入していない。

(4) まとめ

一般的な窯跡の所有位置とレベル、分布調査結果、確認調査結果を総合して考えた場合、今回の道路建設関連用地内及び極めて近い範囲では窯跡等の遺構の存在の可能性が非常に低く、本調査は必要ないと判断された。



第45図 与兵衛沼窯跡 (1/10,000)



第46図 調査区位置図 (1/1,500)



調査地近景



第1調査区

5. 郡山遺跡

(1) 位置と環境

郡山遺跡は、仙台市の南部の太白区郡山2～6丁目にあり、名取川とその支流の広瀬川に挟まれた沖積平野上に位置している。昭和54年に初めて開発に伴う発掘調査が実施されて以来、その翌年から範囲確認のための発掘調査が毎年続いている。遺跡の北部には7世紀末から8世紀初めの官衙である方四町Ⅱ期官衙が、遺跡の南部には郡山廃寺が、またそれらと重複して7世紀半ばまで遡ると考えられるI期官衙が存在する。

(2) 調査に至る経過

仙台平野の遺跡群で調査したのは、第136次発掘調査と第137次発掘調査である。第136次発掘調査は、個人住宅の建築に伴う調査である。また第137次発掘調査は、仙台市立郡山中学校の屋外トイレ建設に伴って実施したものである。両調査とも本書「I 郡山遺跡」の中で、「6. 第136次発掘調査」「7. 第137次発掘調査」として報告しているので、参照していただきたい。したがってここでは、詳細な経過や発見された遺構、遺物などについての記載を省略する。



第47図 調査区位図

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき					
書名	郡山遺跡 21					
調査名	郡山遺跡・仙台平野の遺跡群 平成12年度発掘調査概報					
卷次	21					
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第250集					
編著者名	長島栄一、松本知彦、結城慎一、吉岡恭平					
編集機関	仙台市教育委員会					
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893~8894					
発行年月日	2001年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
郡山遺跡など	宮城県仙台市 太白区郡山三丁目他	04100 01003	38°13'13" 141°18'30"	20000522 ~2001218	1,225m ²	重要遺跡 の範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
郡山遺跡など	官衙跡 など	縄文 ～ 平安	掘立柱建物跡・材木列 井戸跡・溝跡・土坑	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・瓦 上製品・石製品・木製品 陶器・磁器		

仙台市文化財調査報告書第250集

郡山遺跡 21

郡山遺跡・仙台平野の遺跡群

— 平成12年度発掘調査概報 —

2001年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印 刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト

仙台市青葉区立町24-24

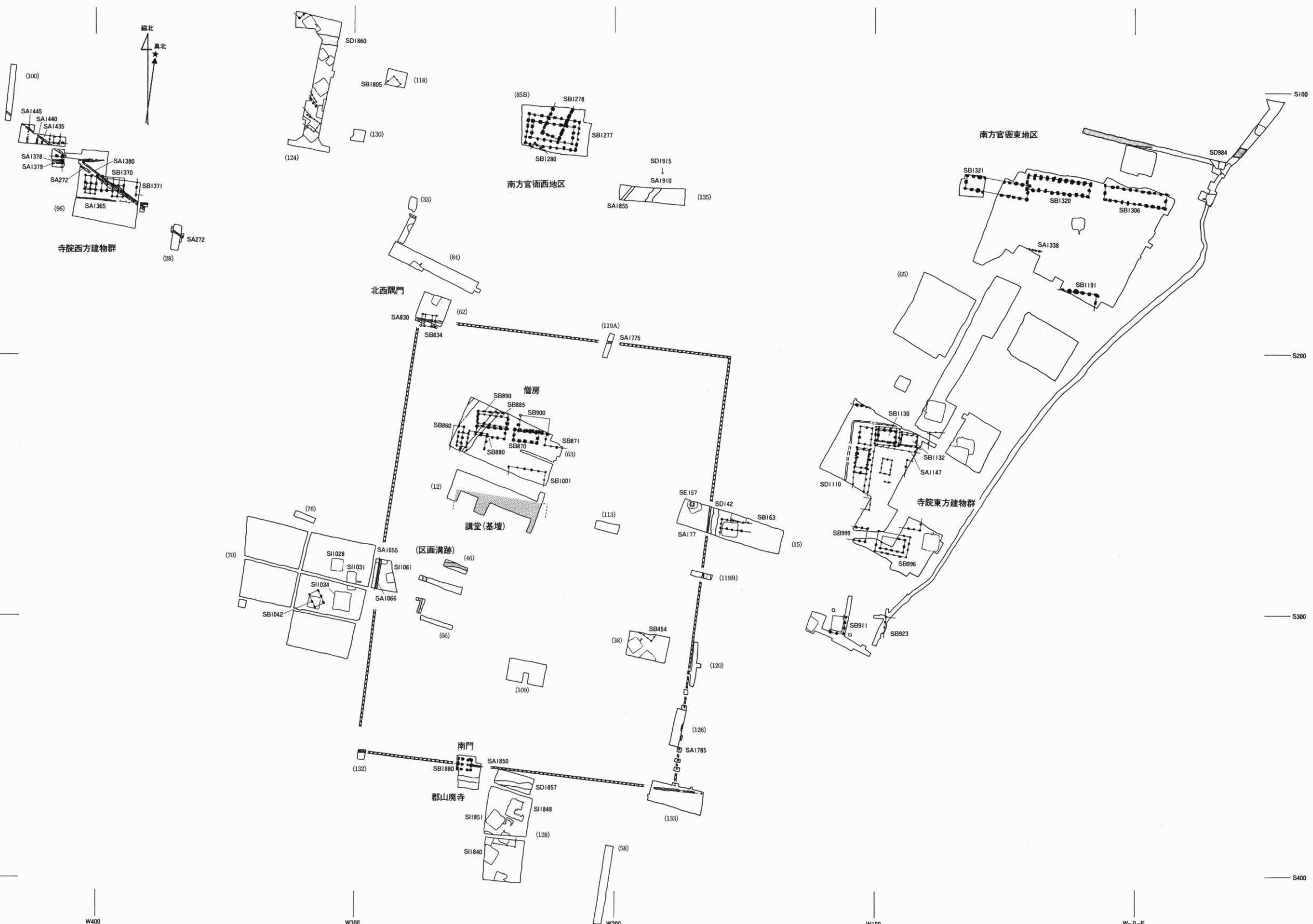
TEL 263-1166

郡山遺跡 21

一付図(1) 遺跡北部遺構配置図(1/800)一

一付図(2) 遺跡南部遺構配置図(1/800)一





付図(2) 遺跡南部遺構配置図(1/800)

() 内は調査次数
〔Ⅱ期官衙の構造を主に掲載している〕

